

修士論文

2012年度(平成24年度)

アマチュアスポーツの自主的リーグ運営に関する研究

－軟式野球を事例として－

Study on voluntary league administration of amateur sports

－Rubber-ball baseball as an example－

論文要項

【背景】

日本で発祥し独自に発展してきた軟式野球は、日本において野球を行う人々の約9割がプレーする競技であり、成人が行う団体スポーツとしてもチーム登録数が最も多いものである。

だが、近年チーム登録数が減少傾向にあり、全日本軟式連盟主催の試合数にも限りがあることから、軟式野球を生涯スポーツとして行うにはプレーヤー自らが活動機会を作り出さなければならない。事例として、本研究では個人が運営を行う私設リーグに焦点を当てた。

【目的】

- ・軟式野球の私設リーグを通じ、プレーヤー自らが他チーム、対戦相手を探し相互に活動機会を作り出すための方法、条件の調査。
- ・私設リーグが参加チームにもたらしている利点の解明。

【方法・対象】

神奈川県内で活動する私設リーグの代表者2名に対してインタビュー調査を行い、得られた証言をもとにリーグに参加するチームに対してアンケート調査を行った。

【結果】

- ・私設リーグの運営には参加チーム同士が試合の企画を行ったり情報交換を行ったりできるウェブサイトの活用が必要である。
- ・私設リーグは実力に恵まれないチームでも一定の試合数を確保できる。
- ・私設リーグは時間・空間、ルールの強制をしないことがチームにとっての利点である。

【結論】

- ・私設リーグの運営は、ルール、日程、参加料等の面で、手軽に参加できるものとして工夫されており、参加チームもそうした全軟連主催大会にはない利点を感じている。
- ・私設リーグは全軟連主催大会より手軽に参加でき、参加チームの試合数増加に役立っている
- ・参加チームは私設リーグそのものが1つの大会であるという意識を持っており、私設リーグは参加チームの活動意欲向上・活動継続への貢献を果たしている。

【キーワード】 軟式野球、私設リーグ、自主的

【Key Word】 Rubber-ball baseball、Private league、Voluntary

慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科

修士課程スポーツマネジメント専修

須賀 優樹

目 次

第1章 研究の背景	1
第2章 軟式野球の概説	5
2.1 軟式野球の歴史	5
2.2 軟式野球の現状	7
2.3 軟式野球に関する先行研究	9
第3章 私設リーグの概説	10
3.1 私設リーグとは	10
3.2 私設リーグの歴史	11
3.3 私設リーグの種類	13
第4章 研究の概要	14
4.1 研究の目的	14
4.2 研究の意義	14
4.3 私設リーグ(扱う対象)の定義	14
4.4 本研究の位置付け	14
4.5 研究の方法	15
4.5.1 面接調査	15
4.5.2 調査対象の選定について	16
4.5.3 アンケート調査	17
4.6 調査対象についての概説	18
第5章 研究の結果と考察	19
5.1 面接調査の結果	19
5.2 面接調査の結果から得られた私設リーグの運営について	25
5.3 アンケート調査の結果と考察	33
5.4 面接調査とアンケート調査から得られた私設リーグ運営のまとめ	45
第6章 おわりに	51
6.1 結論	51
6.2 今後の課題	53
謝辞	54
文献	55

第1章 研究の背景

人々が団体スポーツを行う際にはスポーツクラブやスポーツチームに所属することが多いが、日本における団体スポーツにおいて登録チーム数が最も多く、サッカーに次いで競技人口が多いのが野球競技である。¹⁾

日本の野球には野球全体を統括する組織がなく、どのようなチームがどの程度の人数で活動しているのかといった正確なデータは存在していない。したがって資料や白書によって競技人口にバラつきが見られるが、チームに所属し野球を行っているプレイヤーは概ね120万人～200万人だとされており、そのうちの約90%は軟式野球をプレーしている。

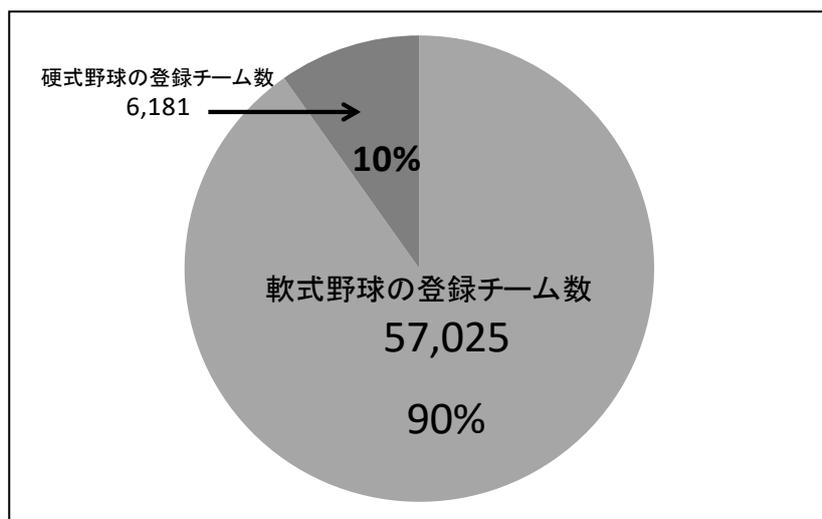


図 1-1 日本における野球の登録チーム数 (2011 年度 各団体から)

1800 年代後半の明治時代より日本人に親しまれてきた野球競技であるが、近年の競技人口は減少傾向にある。野球全体として競技人口が減っている理由としては、①他のスポーツと比較してプレーに必要な道具が多く、一式をそろえる費用負担が大きい②競技人口は常にサッカーと綱引き状態にあるが、手軽に人数を揃えられるフットサルにプレイヤーが流れている、といったものが挙げられている。²⁾ 日本の野球競技人口の中で大きな比重を占めている軟式野球においても、チーム数の減少に歯止めがかかる様子がなく、日本においての軟式野球を統括する組織である財団法人全日本軟式野球連盟(以下全軟連)がまとめた 2011 年度の成人・一般の登録チーム数は 34,925 チームで、年々減少している。

軟式野球のチームには、ある特定の団体や組織に登録しなければならないというような規制はなく、チームの結成も解散も自由に行うことができる。しかし、実際に軟式野球をするためには練習場所や試合会場(野球場・グラウンドなど)が必要となるため、まずはチームの近隣で野球場を管轄している県や市といった自治体のスポーツ課や学校開放等に団体登録をしなければ野球場・グラウンドを予約、使用することができない。

登録には団体のある一定の人数がその地域に居住・在学・在勤しているかどうかといった条件があり、軟式野球チームというものの自体は自由に結成し活動ができるものであるにも関わらず、会場使用や大会出場となると自治体や全軟連の許可や登録が必要になるという点で、軟式野球チーム運営には一定以上の条件を達するチーム基盤が必要となってくる。

こうした一定の条件をクリアした上で次に行われるのは他チームとの試合であるが、軟式野球のプレーヤーたちが最も参加する大会・試合が全軟連が主催する大会である。(表 1-1)

表 1-1 全軟連の主催大会(2012年度 全軟連ウェブサイトより³⁾)

大会名	規模	参加条件
天皇賜杯全日本軟式野球大会	全国	都道府県予選大会で優勝したチーム
高松宮賜杯全日本軟式野球大会	全国	各都道府県予選で優勝しブロック代表となったチーム
国民体育大会	全国	各都道府県予選で優勝しブロック代表となったチーム
東日本軟式野球大会	東日本	都道府県予選大会で優勝したチーム
西日本軟式野球大会	西日本	都道府県予選大会で優勝したチーム
水戸市長旗東日本軟式選手権大会	東日本	都道府県予選大会で優勝したチーム
中部日本都市対抗軟式野球大会	東海・北信越	所属する支部の都市代表チーム
日本スポーツマスターズ	全国	メンバーが満40歳以上で、各都道府県支部から推薦を受けたチーム

上記の大会は全軟連の傘下にある各都道府県や市町村等の連盟支部が主催する大会で優勝、もしくは推薦されうるだけの成績を残したチームが出場することができる。

上記の大会は全国規模のものであっても各都道府県の予選単位のものであってもトーナメント制を採用して試合が行われている。上記の大会以外では各都道府県の連盟支部が独自で行っているものがあり、表 1-2 にその例を示す。

表 1-2 各都道府県の軟式野球連盟が主催する大会の一例

大会名	開催地
東京都軟式野球大会	東京都
神奈川県知事杯争奪軟式野球大会	神奈川県
千葉県軟式野球選手権大会	千葉県
知事杯市町選抜軟式野球大会	栃木県
群馬県町内対抗軟式野球大会	群馬県
新春軟式野球大会	京都府
兵庫県軟式野球選手権大会	兵庫県

このような都道府県単位の全軟連下部組織が独自に開催している軟式野球の大会も全国各地で行われているが、試合はトーナメント制によって行われている。軟式野球はチーム数が多く、大会の日程調整や日程消化の簡易さからトーナメント制を採用しているが、トーナメント制では1度きりの試合の勝敗で次の試合に進めるかどうかが決まってしまうために、全ての参加チームに対して十分な試合数が提供できているとは言えない。

サッカーでは、各都道府県の統括組織が主催する大会を、全てのチームのレベルアップと、勝ったチームと負けたチームの試合数の格差を解消するという目的のためにリーグ制度にて実施している例があるが、全軟連主催の大会、試合においては全ての参加チームが均等な試合数を行えるリーグ戦の例はない。

軟式野球にこうしたリーグ制度が存在していない以上、全軟連主催のトーナメント大会で勝ちあがる実力がなかったり、なかなか試合をする機会を得られないチームは、プレーヤー自らが近隣で活動する対戦相手を探し出すなどして試合を行わなければならない。

文部科学省が2011年に定めたスポーツ基本法⁴⁾によれば、スポーツは、国民が生涯にわたりあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的かつ自律的に行われるよう推進される必要があり、人々がその居住する地域において、主体的に協働することにより身近に親しむことができるようにしなければならない、と述べられている。

さらに今後、成人の週1回以上のスポーツ実施率が3人に2人（65%程度）、週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人（30%程度）となること、を目標としている。しかし、実際には2000年から2010年までの10年間で実施率が上昇した団体スポーツはサッカーのみであり、競技系スポーツ実施者減少への対策が放置されていると指摘されている。⁵⁾

したがって、軟式野球のプレーヤー自身が野球場やグラウンドを確保し、チームの活動範囲や競技レベルに合った対戦相手を見つけるなどして定期的な活動を行うのは容易ではないと言える。

このような現状の中でも各チームが活動機会を獲得する方法の1つに、軟式野球には全軟連主催ではない別の大会としてや、チーム同士の交流等を目的として結成されている「私設リーグ」と呼ばれるものが各地に存在している。私設リーグはある特定の地域を中心に活動しているチーム同士が何チームか集合して、総当たり戦などのリーグ制によって試合を行っている集団である。

この私設リーグに加入することによって、対戦相手を見つけやすくなる、試合の実施機会が増える、といった定期的な活動を目指すチームに対しての貢献があるのであれば、今後の軟式野球においては私設リーグのような仕組みが必要なのではないか。

さらに企業や法人ではなく、軟式野球を楽しむ個人が主体となり運営する私設リーグの成り立ちや運営に必要な条件などを明らかにし、私設リーグに加入したことによって参加チームがどのような恩恵を受けているのかどうかを明らかにすることができれば、スポーツ基本法にある、スポーツを行う人自身の自主的、主体的な協働を、競技人口や実施率が低下している軟式野球において実現させ、競技人口減少に対してや実施率の向上に対して貢献できるのではないかと考え、以上のような背景から研究に至った。上記の背景をふまえた本研究の概念図を図1-2に示す。

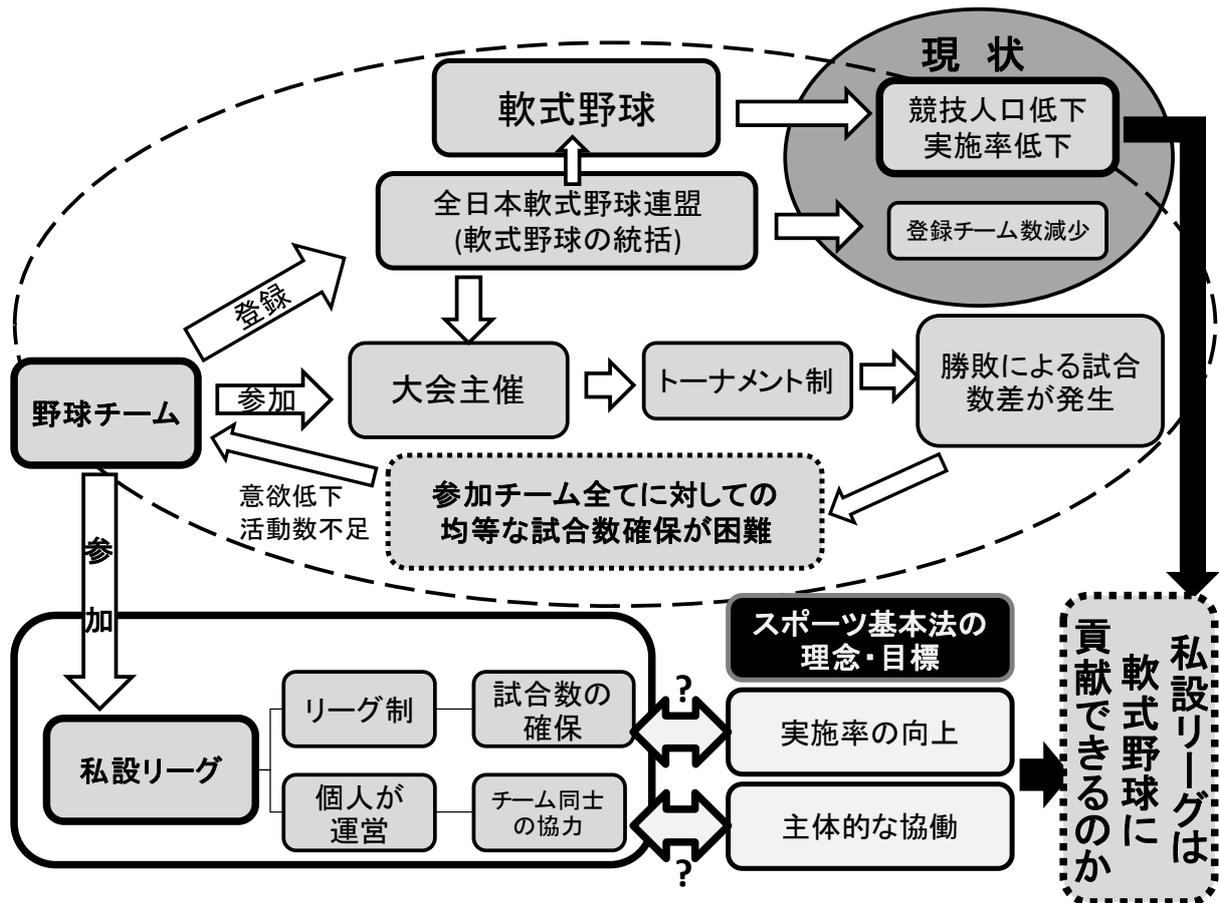


図 1-2 研究の概念図

第2章 軟式野球の概説

軟式野球の成り立ち、統括組織、現状について

2.1 軟式野球の歴史

日本で野球が初めて行なわれたのは、1872年に開成学校のアメリカ人教師が紹介してからだと言われている。1880年ごろになると次第に学校でも野球が行なわれるようになり、大学生によって野球が行なわれ対校試合なども活発に行なわれるようになった。⁶⁾1910年ごろになると、慶應義塾大学、早稲田大学などの対校試合が全国の少年たちの興味を引き、野球は子供たちの間に急速に広がっていった。野球の用具は高価であったため、ボールは日本に昔からあったおもちゃ用のボールで間に合わせた。次いでスポンジ製のボールが普及したが耐久性がないことから本格的にプレーを楽しむためのボールが要望され、1918年に京都市の小学校の教師らが少年野球用ゴムボール（後の軟式球）を開発した。ボールが全国的に普及したことで大会が各地で開催され始め、全国の優勝校を集めた大会が開催された。こうした大会を統括する団体として大日本少年野球協会（後に財団法人）が結成された。その後、少年時代に野球を楽しんだ人が野球チームを作る動きが各地で生まれ、クラブチームが誕生していった。当時は野球専用のグラウンドは少なく、試合や練習時には空き地に仮設のネットを張るなどしていたために、軟式野球が草野球と呼ばれるようになったとされている。

その後も各地でボールの改良がなされ、地方ごとで軟式野球協会や連盟が設立され大会が運営されるなどますます盛んになっていったが、1930年代後半からの戦時下においてボールの原料であるゴムの使用が制限され、ボールが少量しか生産できなくなった。これらのボールを全国各地のチームに分配するためには軟式野球の団体が1つになって、登録されたチームに対して分配するしか方法がなくなり、1939年に日本軟式野球総合協会が設立された。

戦後になると軟式野球愛好者たちは全国各地で軟式野球の復興をめざして立ち上がり、東京府軟式野球連盟の数人らが東京都軟式野球連盟と同時に全国組織の結成の意見書と全日本軟式野球連盟規約の草案をまとめ、1946年8月26日、岸記念体育館で全日本軟式野球連盟の創立総会を開催し日本体育協会への加盟を申請、9月5日に加盟承認を得た。こうして11月1日から開かれた第一回国民体育大会の正式種目として軟式野球競技が参加することになり、以降軟式野球は広く国民に親しまれる競技に発展していった。⁷⁾

現在のように休日に職場の同僚や地元の仲間などとチームを結成して余暇を楽しむ軟式野球が定着し始めたのは、高度成長や、保健体育審議会の「体育・スポーツの普及振興に関する基本方針について(1972年)」の答申が出された時期である。この答申の中心は施設整備におかれ、スポーツ施設の建設や、空き地・河川敷等の整備によって野球場が増加したことによって一般市民が野球に親しむ機会が増え、チームを結成して社内の交流を図りたい企業や町内会のチームが増加していった。しかし、野球をやるためにはチームが必要であり、最低でも9人揃えなければならず、学生生活を終えた社会人にとって平日は仕事があるため、人数の集まりやすい休日や早朝に野球を行うことになる。活動場所は必然的に各々の地元か職場に限られ、大別すると、野球チームとしては地域住民を主体とする「地域クラブ型」と企業の従業員によって構成される「職場型」チームという2つの異なる背景を持ったチームが混在することになった。

さらに軟式野球の発展に影響を与えたことは、全軟連傘下の地域競技団体が地域住民によって組織化されたことである。その管轄範囲は概ね群市区町村であり、群市区町村ごとに「〇〇連盟」や「〇〇協会」といった名のもとに設立されていった。こうした組織は当該地域において行政や体育協会、地元企業らと共同して大会を開催し、そのための野球場・グラウンドを確保し、審判員を派遣した。それによって大会参加チームは自らグラウンドや試合相手を探す負担を減らすことが可能になっていった。⁸⁾

表 2-1 軟式野球の主な出来事 ^{3,7)}

年度		事項
1916	大正5	京都少年野球研究会が発足
1917	大正6	同研究会によりゴムボール野球のルールが制定される
1918	大正7	少年野球ボールが発明される
1919	大正8	ボールが完成、少年野球が始まる
1928	昭和3	軟式野球の名称が正式に決定
1932	昭和7	文部省の野球統制令によって全国の組織、大会が消滅
1939	昭和14	軟式ボールが配給制となる
1946	昭和21	全国軟式野球連盟が結成され、体育協会へ加盟
1948	昭和23	連盟に天皇杯全日本大会が設置
1951	昭和26	競技技術差によるランク制を導入
1957	昭和32	B級、C級のチームのための全国大会を開始
1988	昭和63	国体の軟式野球が成年1部、2部となる
2005	平成17	日本スポーツマスターズに参加
2007	平成19	学童大会優勝チームの海外派遣
2008	平成20	国体が隔年開催になる JADAに加盟する
2011	平成23	全日本軟式野球連盟が公益財団法人へ移行

2.2 軟式野球の現状

現在、日本の軟式野球を統括しているのは財団法人全日本軟式野球連盟(全軟連)である。

表 2-2 に示すように、2011 年度の全国の登録チーム数は「一般(社会人)」が 34,925、「少年(中学生)」が 7,879、「学童(小学生)」が 14,221、その他大学チーム(準硬式含む)や専門学校チームなどが全軟連に登録しており、全軟連の登録数からの推測に限れば、軟式野球の競技人口は約 120 万人と推計されている。³⁾

図 2-1 に示すように、2006 年～2011 年までの 5 年間では、全軟連に登録しているチーム数は全体的にやや微減傾向にある。特に登録チーム数が減少しているのが「一般(社会人)」の категорияで、過去 5 年間からの全国の合計でおよそ 2000 の成人チームの登録数が減少し、下降が続いている。

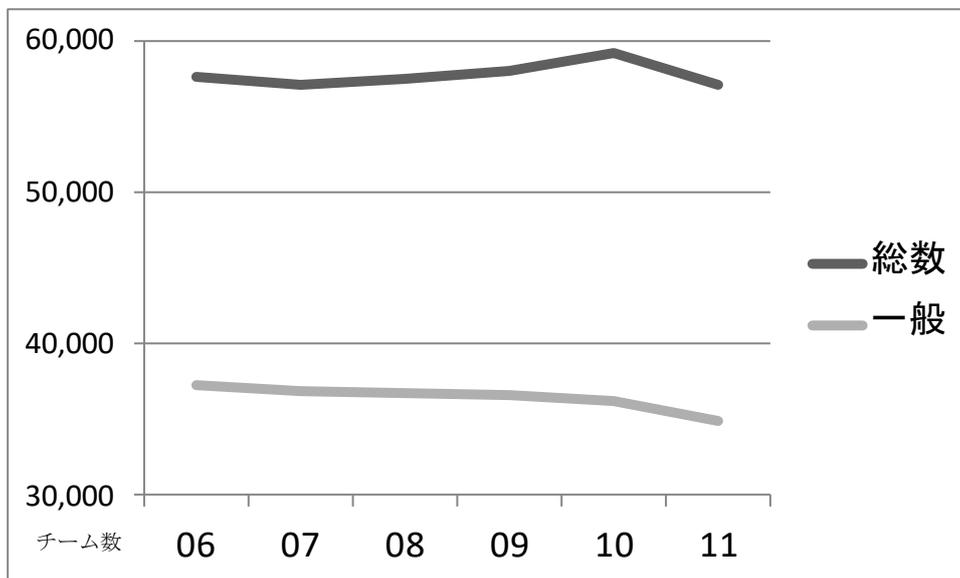


図 2-1 全日本軟式野球連盟の登録チーム推移(総数と一般・社会人部)

表 2-2 登録チーム数推移の詳細

年度	総数	一般	少年	学童	大学協会	専門学校	還暦連盟
06	57,530	37,273	5,269	14,988	489	216	398
07	57,129	36,845	5,316	14,968	491	225	416
08	57,415	36,710	5,731	14,974	485	219	398
09	57,975	36,618	6,643	14,714	498	201	428
10	59,191	36,199	8,168	14,824	497	201	450
11	57,025	34,925	7,879	14,221	474	199	457

一方で、登録チーム数が増加しているのは「少年(中学生)」の категорияと「還暦」の categoriaである。特に「少年(中学生)」の categoriaは過去 5 年間で 2500 チームほど登録数が増加している。

野球の市場の中で最も大きなものが一般・成人の軟式野球であり、成人軟式野球の競技人口の減少は野球全体の市場の低迷にも直結している。図 2-2 に示すように、野球・ソフトボールを含めた市場規模は 2007 年～2012 年の 5 年間で減少傾向にある。²⁾

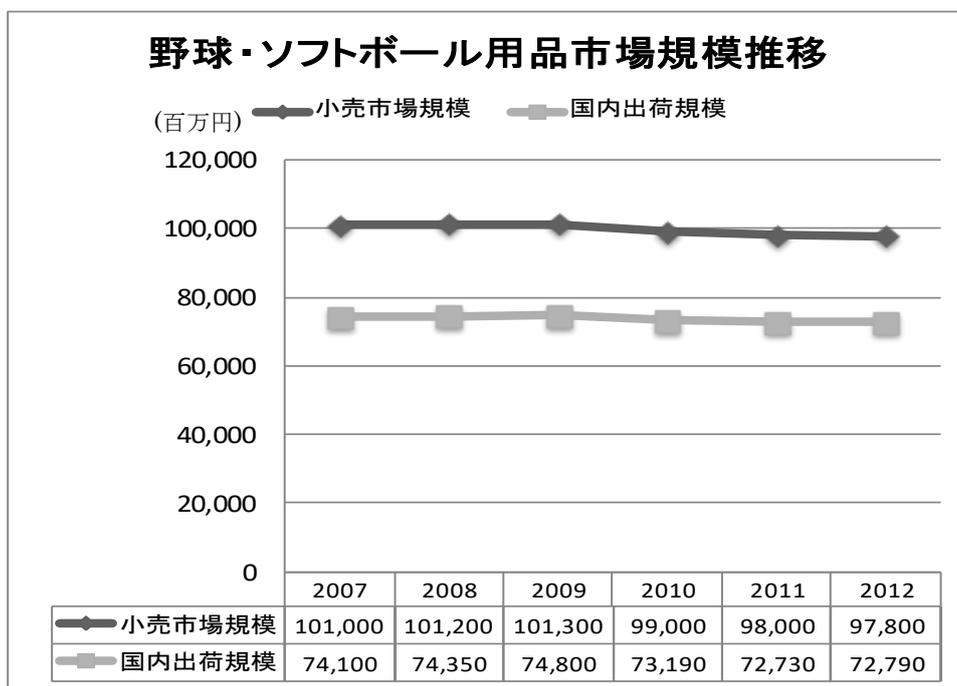


図 2-2 野球・ソフトボール用品市場規模推移²⁾

2.3 軟式野球に関する先行研究

本研究で参考とした先行研究について

表 2-3 軟式野球に言及した研究

論文名	著者	出所	年度	内容
地域スポーツ集団の社会学的研究 軟式野球チームの存続と崩壊	中島 豊雄	名古屋大学教養部紀要. B, 自然科学・心理学 (16), 59-84,	1972	軟式野球チームの存続 と崩壊の社会的要因
スポーツ集団の運営形態に関する 研究～特に子どものスポーツ チームの運営に注目して～	藤田 紀昭	スポーツ社会学研究3	1995	少年野球チームの運営 詳細
社会人軟式野球の組織構造と運営： 社会人硬式野球及び軟式野球の比較	小林 秀一	愛知学院大学教養部紀 要 45(1), 135-150	1997	硬式と軟式のチーム 運営、選手心理の違い
軟式野球の将来的発展に関する 課題についての検討	田中 亮太郎	大阪芸術大学紀要		軟式野球の女子への普 及、国際普及について
地域集団スポーツにおける社会関係 の形成、継続・発展の規定要因： 神奈川県旧・津久井郡城山町に おける軟式野球を事例として	田中 恵	桜美林大学 教育の現 場から9,75-95	2009	軟式野球チームの 活動・参加が人間関係 の形成に貢献
各都道府県における軟式野球の 現状とその発展策に関する研究	長久保 由治	早稲田大学大学院2010 年度リサーチペーパー	2010	軟式野球連盟の現状、 問題点などを指摘

軟式野球の先行研究において特筆すべきは中島の研究で、地域の中で発生する軟式野球チームがどのように存続し、発展していくのか、また、活動が続かない要因は何かを社会学の視点から述べている。チームが存続するための4つの条件として、①集団的基盤があること②強力なリーダーの存在③周辺施設の充実④チームの活動レベルに適した組織や大会の存在があること、を挙げている。以上の4つの要因が重なり、チームの存続や崩壊に影響すると結論付けている。⁹⁾ 小林は硬式野球と軟式野球の社会人野球におけるチーム活動、選手の特徴などを調査し、軟式野球の選手は硬式野球の選手より年間試合数は少なくなるが、その分、野球活動と仕事との両立を重視しており、安全性と経済性の両面で優れた軟式野球は日本独自のスポーツとして育つ環境にあると述べている。ただし、対象は職場の軟式野球チームであり、地域で発生するチームについては述べていない。田中は町内の住民で構成されている軟式野球チームに着目し、練習や試合による地域交流は一体感を生み出し、若者、高齢者に関わらず幅広く楽しめる軟式野球は地域の生涯スポーツとしての価値が認められると結論付け、今後は軟式野球に関する研究の積み重ねが必要になると述べている。⁸⁾ 長久保は自身が全軟連に勤めているという立場から全軟連の現状や問題を明らかにし、軟式野球が多くの愛好者に親しまれる生涯スポーツとしての役割を果たすためには、連盟全体の組織強化の転換期である今こそ競技運営改革と選手強化を実行しなければならない、と述べている。

以上のように日本発祥の団体スポーツとして多くの人がプレーしているにも関わらず、軟式野球に関する研究は歴史、量、質の面で十分になされてきたとは言い難く、既存の研究では個々のチーム内の継続要因や人間関係に言及したものが多いため、今後は軟式野球全体としてどのようにすれば競技の普及、発展、継続が行われるのか、愛好者・競技者に対してどのような貢献ができるのかという研究が求められる。

第3章 私設リーグの概説

3.1 私設リーグとは

私設リーグは、全軟連主催の大会や試合が各地域の体育協会やスポーツ振興課といった組織と共同で行われることや、長年軟式野球を統括してきたという歴史的な背景から、一般的に「公式戦」とみなされており、「公」には属さない「私」的な活動・試合をする集まりであるという意味から「私設」と呼ばれている。「私設」という正式な名称の定義があるわけではなく、中島は「私設的リーグ」と記載しているが⁹⁾ 現在では軟式野球以外の団体競技でも当該組織を「私設リーグ」という名称において表現していることから、本研究でも「私設リーグ」という名称に統一する。

私設リーグとはいくつかのチームが集まって、リーグ戦、総当たり戦を行い、勝ち点や勝利数によって順位を決めるような仕組みである。全軟連主催の試合は登録チーム数の多さや日程調整の簡易さによってトーナメント戦でチームの実力をはかり、勝ち上がれば市大会、県大会、全国大会に出場することができるが、勝てば次の試合、負ければ終わりの一発勝負の試合である。したがって、あまり勝ち進む実力がないチームは敗戦することによって次の試合の機会を得ることができない。対戦相手が必要な団体スポーツにおいて、試合をする機会が得られないというのは活動頻度の低下を招き、チームが継続する意欲も低下する。⁹⁾

全軟連の試合がトーナメント制で優劣を決定するのに対して、私設リーグは基本的には参加チーム全てと対戦ができ、総合的な成績によって順位を決定する。負けても次の試合ができる大会という意味では連盟主催の大会よりも各チームの試合数が増え、他チームと成績を競い合いながら試合をすることができる。

3.2 私設リーグの歴史

私設リーグが全国各地でいつごろ発生し、どのような経過をたどって現在に至っているのかといったことを明確に示した資料や研究等は存在していないが、日本のスポーツ政策の歴史、軟式野球の歴史、各私設リーグのウェブサイト等から私設リーグに関する事象を推測すると以下2つのことが言える。

①現在の私設リーグのような形で、独立した個々の数チームが集合し定期的に試合を行うようになったのは1970年前後からである

1972年の中島の論文によると、⁹⁾活動がほとんどできなかったチームが私的なリーグを作るようになったことで活動が活発になったと述べており、図3-1に示すように、筆者が全国から100の私設リーグのウェブサイト进行调查した結果、最古のリーグは1971年に結成されていることから、この時期に町内会や商店街、自営業者といった人々がチームを結成し互いの活動機会、試合を増やすために定期的なリーグ戦を開始したとみられる。1969年から1975年の間にかけて全国の野球場が853から1,911¹⁰⁾とほぼ倍増していることもこうした野球チームや私設リーグが盛んに活動する契機になったと言える。

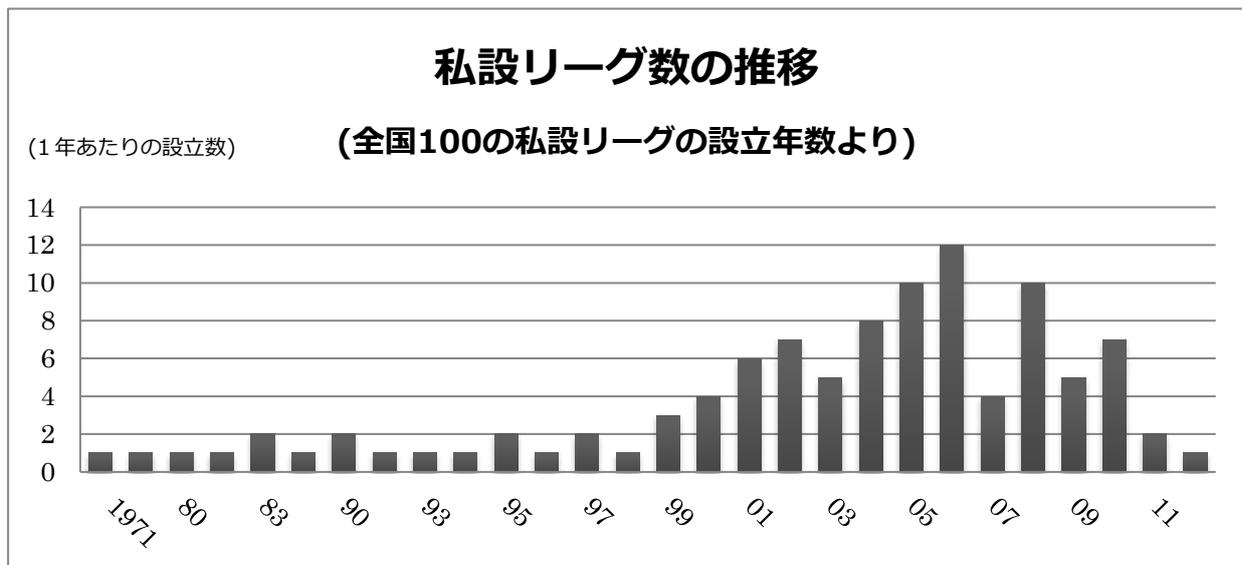


図3-1 年度ごとの私設リーグ新規設立数の推移

②私設リーグは 2000 年代に入り急激に増加した

1970 年前後から各地に発生してきた私設リーグであるが、1980 年代、90 年代とあまり新規のリーグ設立数は伸びず、町内会や地元商店等の限られた範囲での私的な集まりのもとでリーグ戦をおこなっていたが、2000 年代に入ると急激に新規のリーグ設立数が増加する。

考えられる理由としてはインターネット普及による影響が最も大きい。本研究で調査・対象とした私設リーグは必ず独自のウェブサイトを所有しており、そこで試合のマッチメイクや情報交換、成績の公開などを行っている。日本においては 1995 年に「インターネット」が流行語となるほどの商業化が始まり、2000 年には政府が IT 基本法を設立させ、国家単位でインターネットへの積極的な取り組みが開始された。こうしたことから、最も私設リーグの数が増加している 2005 年～06 年にかけてインターネット世帯普及率は 80%を超え、いつでも、どこでもインターネットにアクセスできる環境・時代に突入した。¹⁾

急速なインターネットの普及によって、近年展開されているスポーツ愛好者の活動を支援する情報サービス等も利用が活性化してきており、きっかけはウェブサイト上であってもスポーツ参加というリアルな活動があるため、大会や練習などでプレーヤー同士が直接会う機会も多く、バーチャルなコミュニケーションがリアルなコミュニケーションに繋がり、愛好者の強固なコミュニティが形成されているという。¹⁾

以上のことから、私設リーグは 1970 年前後の公共スポーツ施設数の増加、職場や町内会等による軟式野球チームの増加と同時期に全国各地に発生しはじめ、2000 年代からのインターネットの普及によってこれまでごく限られた閉鎖的な集まりが、ウェブサイトを活用することでその存在が公になり、急激に対象地域の範囲やリーグに参加できるチーム数が拡大し、発展しつつある仕組みと言える。

3.3 私設リーグの種類

現在の軟式野球における私設リーグは表 3-1 に示すように、大別すると 2 つの種類に分けることができる。1 つめは、ある軟式野球のチームやそのチームの代表者などが幹事・運営者となって他のチームを集め運営されている私設リーグである。全国各地の私設リーグではこのような形態をとって運営されているリーグが一般的であり、プレーヤー自らが運営に関わり責任を負うという点で完全な「私」的な集まりである。必ず全チームが同じ試合数をリーグ内にて行う必要があるという場合や、試合数に特に制限がないリーグなど、仕組みは様々であり、参加チーム数も 4 チーム程度のリーグや 50 チーム以上参加しているリーグなどがある。参加チームの活動範囲も同一の市区町村の場合や近隣の様々な都道府県からチームが集合して結成されているリーグなどがある。こうしたリーグの場合は運営者が法人ではないので営利目的で運営されるわけではないが、リーグのウェブサイトの運営費用や、リーグに参加しているチームに対しての賞品の授与、リーグでの会合などをする場合にて各チームから参加料を徴収する場合もあるが、全軟連主催大会や下記の企業主催型私設リーグと比較して割安である。

2 つ目は、株式会社や任意団体等が主催して試合を開催している大会・リーグである。こうした大会は 1990 年代後半から徐々に設立され始め、スポーツ用品メーカーなどが協賛しトーナメント戦やリーグ戦を開催している。開催範囲は上記の個人的な私設リーグよりも広く、首都圏や関東全域のチームを募集対象にしている大会や全国規模で試合を行う大会も存在する。参加費用は 1 大会ごとに数万円を支払う場合が多く、手軽に参加できる費用ではないが、試合のインターネット中継や成績上位のチームはプロ野球で使用する野球場で試合ができるなどのメリットがあり、数百のチームが参加している現状からこうした大会にも一定の需要があると見える。

表 3-1 軟式野球の大会の比較

	全軟連主催試合	私設リーグ (プレーヤー運営型)	私設リーグ (企業主催型)
登録方法	全軟連の市区町村 支部に登録	代表者に連絡	Web上で参加登録
参加チームの範囲	全国	主に県内・市内など	全国～複数県
対戦形式	トーナメント戦	リーグ戦	トーナメント戦 リーグ戦
試合会場	運営側が確保	主に参加者が確保	大会側が確保 参加者が確保
試合日程	運営側が指定	参加者が調整	運営側が指定 参加者が確保
ユニフォーム	全員統一	不揃い可	全員統一
ランク分け	あり	ありorなし	あり
参加コスト	1大会あたり ¥10,000～30,000程度	年間 0～¥20,000程度	1大会あたり ¥10,000～30,000程度
参加メリット	運営者が試合会場と 審判員を確保	安価に近隣のチームとの対戦が しやすくなる 日程や会場の強制がない 用具の規制が緩やか	Web上での成績管理 プロ野球の球場での試合 リーグ戦・トーナメント戦を 選択可
参加デメリット	参加費用が高額 用具の規制が厳しい 会場、日程の強制	同一チームとの対戦が多くなる 運営の責任が曖昧	参加費用が高額 会場、日程の強制

第4章 研究の概要

4.1 研究の目的

本研究の目的は軟式野球における私設リーグの発生経緯や運営の工夫、参加チームが受けている恩恵を明らかにし、全軟連への登録チーム数や軟式野球競技人口が減少している現状に鑑みて、プレーヤー自らが継続的にスポーツ活動を作り出すための方法を提案することである。

4.2 研究の意義

スポーツ基本法の理念にあるように、スポーツは人々が主体的に協働して行われるよう促進されなければならないという前提において、私設リーグを通じプレーヤー自らがスポーツの活動機会を創造する方法を提案できれば、対戦相手が必要な軟式野球の活動の幅を広げ、生涯スポーツとしても軟式野球を継続的に行える可能性を高められると考えられる。

4.3 私設リーグ(扱う対象)の定義

本研究ではスポーツをプレーする人自らが主体となってスポーツ活動の機会を作り出す必要があるという視点から、プレーヤーが代表者となって法人格を持たずに(営利目的ではない)組織・運営を行っている私設リーグを対象とする。各チームが自主的に登録し、試合を行うという意味では全軟連への登録も企業主催型リーグへの参加も同一であるが、運営者が個人であり全チームの相互協力がなければリーグそのものが進行しないという点で、プレーヤー自らが直接・間接的に運営に参加する私設リーグを対象とする。

4.4 本研究の位置付け

軟式野球に関する研究は、大別すると軟式野球の全体の状況(歴史や全軟連の運営)に関するようなマクロ的なことと、個々のチームに焦点を当て、チームがどのように運営されどのような人が参加しているのかといったようなミクロ的な視点において研究がなされてきているが、本研究のようにチームの活動、試合の機会を増加させるリーグ運営やある一定の範囲内で活動する個々のチームが私設リーグという場において集合する経緯、そこで生まれる現象、結果について言及した研究はなく、試合実施における集団の運営とチーム個々が抱える問題点を同時に取り上げるという点で軟式野球に関する研究の中でも新たな視点での研究と言える。

4.5 研究の方法

4.5.1 面接調査

私設リーグを運営している代表者に面接調査を行った。

面接調査では調査者が直接、現場・フィールドに出向きデータを収集する「調査的面接」を行い、1対1の個人語りを行った。

面接の進行は「半構造化面接」にて行った。質問項目をあらかじめ準備し、質問項目にそって調査者が積極的に質問していく形式を採用した。調査場面での状況に合わせて質問の順序や項目などを変え、その場の語りに合わせた具体的な質問を追加した。

記録は、質問項目を用意した質問紙への記録と、ICレコーダーを同時に使用した。

面接調査の目的は、私設リーグの運営代表者から私設リーグを設立しようとした状況や動機、私設リーグ運営の仕組み、私設リーグがプレイヤーに対して果たしている役割などを聞き出し、私設リーグ運営の全体像を把握することである。

面接調査において質問を行った項目は以下の通りである。

- ・リーグ運営のきっかけ、動機、目的
- ・リーグの目標、どうあるべきか
- ・リーグの運営知識、ルール等の決め方
- ・リーグの運営者として力を入れている点
- ・リーグ運営の苦労、運営の問題点
- ・運営年数経過によるリーグ内での変化
- ・リーグの存在意義、参加チームにもたらしている利点
- ・リーグに参加しているチームの特徴、参加チームの反応
- ・全軟連主催試合と私設リーグの相違
- ・今後の私設リーグの方向性、予測
- ・軟式野球、私設リーグ全体について感じること

4.5.2 調査対象の選定について

調査対象の選定について、下記のような条件にて判断し、取材協力を得た私設リーグの代表者に対して面接調査を行った。

- ①個人が運営しているリーグであること
- ②リーグのウェブサイト所有し、活動の公開及び代表者の連絡先の明記があること
- ③当該リーグに10チーム以上参加していること
- ④複数年、活動の継続を行っているリーグであること

①は、本研究の目的である、プレイヤー自身が主体的に協働して活動をしているリーグという意味で企業や任意団体ではなく、個人が代表者として運営されているリーグを選定した。

②は、ウェブサイトを活用し様々なチームの活動の機会を作り出し、かつリーグの活動を誰に対しても公開しているリーグであるかどうかで選定した。

③は、ある程度の参加チーム数がなければ年間でそれぞれのチームと定期的に試合を行えるリーグとは言えないため、10チーム以上の参加が妥当と判断し選定した。

④は、複数年(最低3年程度)の活動の継続を行っているリーグは様々な運営の工夫をしたり困難を乗り越えたりしていると予想でき、一定の運営基盤があると思われるため選定の条件とした。

以上の条件を満たした私設リーグを選定し、取材協力を得た2つのリーグ(以下、Aリーグ、Bリーグとする)の代表者に対して面接調査を行った。

4.5.3 アンケート調査

私設リーグ代表者に対しての面接調査によって得られたデータをもとに私設リーグ運営の全体像を把握したのちに、実際に私設リーグに参加しているチームに対してアンケート調査を行った。アンケート調査によって私設リーグが軟式野球を行うプレーヤーに対して実際にどのような貢献を果たしているのかを明らかにする。

アンケートはAリーグ、Bリーグに参加するチームのうち、Aリーグの14チーム、Bリーグの7チームの代表者から回答を得た。

なお、2つのリーグに対してのアンケートは各リーグの代表者との都合により、若干異なるものになっているため、アンケート結果は統合せずに、リーグごとに別々に記載する。

共通する質問項目は、

- ①軟式野球をする上でのチームの活動範囲
- ②チームとして月にどの程度活動回数があるか
- ③活動の内容に関して、試合と練習のどちらが多いか
- ④軟式野球をする上で、どのような問題点や苦労があるのか
- ⑤なぜ私設リーグに加入しようと思ったのか
- ⑥私設リーグに加入してどのような利点があったか
- ⑦私設リーグに加入後、チームの活動の中で私設リーグをどのような位置付けで扱うのか

本研究にて明らかにしたい、私設リーグに参加することによって個々のチームがどのような恩恵を受けているのかという点に関しては、設問⑥にて行った。設問⑤と⑦に関しては、私設リーグに加入する前と、加入後について活動や意識に差が見られるのかを明らかにするために質問を行った。

設問①②③④に関しては、私設リーグに加入するチームはどのようなチームが多く、普段どのような活動をしているのかを確認するために質問を行った。

4.6 調査対象についての概説

実際に研究の協力を得た軟式野球の私設リーグについて概説する。

A リーグ

A リーグは神奈川県横浜市と横須賀市を中心とした周辺地域に活動拠点を置く 18 チームで構成された私設リーグである。2000 年に設立され、2012 年度で 12 回目のリーグ戦を行っている。チームの実力によって 18 チームを 1 部と 2 部のランクに分け、リーグ戦を行っている。リーグのウェブサイト内掲示板による参加チーム同士のマッチメイク、リーグ戦による各チームの順位だけではなく、選手個々の投手・打撃成績もランキング付けを行っている。

B リーグ

B リーグは神奈川県横浜市を中心とした地域に活動拠点を置く 40 チームで構成された私設リーグである。リーグの母体は 2000 年ごろから存在していたが、2010 年にリーグ代表者が変更となり、その後新たにリーグをリニューアルして 2012 年で 3 年目のリーグ戦を行っている。リーグのウェブサイト内掲示板による参加チーム同士のマッチメイク、リーグ戦による各チームの順位付けを行っている。

表 4-1 調査対象となる私設リーグについて

2012年12月時点	Aリーグ	Bリーグ
活動範囲	神奈川県東部	神奈川県東部
リーグ継続年数	12年	3年(母体は9年前から)
参加チーム数	18	40
リーグ全試合数 (2012年)	73	100
チーム成績	ウェブ上でランク付け 各チームの自己申告	ウェブ上でランク付け 各チームの自己申告
個人成績	ウェブ上でランク付け	なし
マッチメイク方法	リーグ専用のウェブ掲示板	リーグ専用のウェブ掲示板
チームのランク分け	1部、2部制度	なし
球場の利用予約	各チームが行う	各チームが行う
参加費用(年間)	¥10,000~15,000	¥1,000
賞品	あり	なし

第5章 研究の結果と考察

5.1 面接調査の結果

①A リーグ代表者における面接調査の結果

A リーグ運営のきっかけ、動機、目的（2000年に設立）

- ・自身が軟式野球チームの代表者として軟式野球をしていた。（現在も）
- ・インターネットは現在のように普及しておらず、他チームの情報を得ることができなかった。したがって、対戦相手を見つけるのに苦労した。
- ・野球場利用のための抽選も平日に行われるなど手間と労力がかかり、チームの活動継続に不安を感じた。
- ・手軽に他チームと試合をしたり合同で練習ができるようなネットワークの必要性を感じた。
- ・全軟連主催試合では他チームとの交流が図れないと感じ、別の時間帯にて同じグラウンドで練習していた他チームに声をかけて、自分で数チームを集めリーグを作った。

A リーグの目標、どうあるべきか

- ・ただ野球をやる機会を作る、というだけではなく、野球をリーグ参加チーム全員で継続して楽しめるようなネットワーク作りをすること。

A リーグの運営知識、ルール等の決め方

- ・リーグ開始当時は私設リーグをインターネットで公開している団体が少なかったが、既存の他リーグ等を参考にして、まずはリーグのウェブサイトを作った。
- ・リーグ開始当時はチーム数も少なく、仲の良いチームだけが参加していたので暗黙の了解が通じ、明確なルールは必要なかった。
- ・年月を重ねると、参加チームが脱退、加入などを行うようになり、様々な意識や価値観を持ったチームがリーグを構成するようになったため、ルール作りの必要性に迫られた。
- ・共通の認識がないままにリーグを行うと問題が発生する場合が出てきたため、年を追うごとにリーグ内のルールを付け足している。

A リーグの運営者として力を入れている点

- ・参加チーム同士のトラブル回避。参加チーム同士が互いの意見を主張し合い、折り合いが付かなくなった場合には仲介に入る。
- ・ウェブサイトの充実。インターネットを通じて、気軽に野球ができる機会を作り出したい。

A リーグ運営の苦勞、運営の問題点

- ・難しい点は、リーグに参加する意義を全チームに共有してもらうこと。
- ・私設リーグを通じての野球のネットワーク作りという意識を、より共有してほしい。

運営年数経過による A リーグ内での変化

- ・チーム間の信頼関係を築くことが年々難しくなっている。
リーグ開始当初はチーム間に絶対的な信頼関係があったが、現在は、野球さえできれば、という意識をもったチームが増えてきたと感じる。
- ・リーグの運営について、参加チームの代表者全員で話し合う会議にも参加をしないチームが出てくるようになった。

A リーグの存在意義、参加チームにもたらしている利点

- ・余暇に楽しむ趣味の野球として、本気でもなく遊びでもないという意味でリーグの存在は理想的ではないかを感じる。
- ・全軟連主催の試合はトーナメント制のため、実力の劣る選手を試合に出しにくい場合などがあるが、リーグ制なら色々なチームメンバーを自由に出場させられる機会が増える。
- ・リーグ制度によって、各チームの試合数を一定に確保できる。
- ・チームの実力向上の場、あまり野球場予約がとれないチームの相互協力の場としてリーグの存在意義はあると感じる。

A リーグに参加しているチームの特徴、参加チームの反応

- ・真剣に試合で勝ちを狙うチーム、野球をたのしめればいい、といったチームなど、様々な意識を持ったチームが参加している。
- ・参加チームからは、ネットワークが広がってよかった、などの意見をもらうことがある。

全軟連主催試合と A リーグの相違 (表 5-1)

- ・リーグ制は、負けても違うチームと試合ができるため、試合数を一定に確保できる
- ・リーグでは試合時間に制限を設けていないので、試合当日の状況によって決めて良い。
- ・リーグは全軟連主催試合に比べ、安価に試合をすることができる。
- ・リーグはチームの正規メンバー以外の選手も、試合に出場することを認めている。
- ・リーグは、参加チームそれぞれが野球場の予約と試合の日程を決めるため、時間・空間的な強制がない。

表 5-1 全軟連主催試合と A リーグの比較

	Aリーグ	全軟連主催試合
試合形式	リーグ制	トーナメント制
試合時間	時間制限なし	1時間30分
参加料金	年間1万円弱	1大会あたり2~3万円
正規メンバー以外の 試合出場	可	不可
試合日程・会場	自由	強制

今後の A リーグの方向性

- ・参加チームの一番の優先は、全軟連主催の試合に出場することであるが、私設リーグの試合が最優先であると思ってもらえるようになりたい。
- ・老若男女、様々な人が野球を楽しめる場を提供していきたい。
- ・ネットワーク作りや多世代交流に私設リーグとして応えていきたい。
- ・近隣の他の私設リーグとの試合やイベントも行っているが、今後より活発にしていきたい。

軟式野球、私設リーグ全体について感じること

- ・野球をする場や、野球を継続的に行えるチームが少なくなってきたと感じる。
- ・全軟連の大会運営に疑問を持っている。
- ・個人が行う私設リーグは運営代表者の負担が大きいが、各チームの活動ペースや目標に合わせて活動できる私設リーグという場は、意義のあるものだと感じる。

②B リーグ代表者における面接調査の結果

B リーグ運営のきっかけ、動機、目的（2010年設立）

- ・知り合いの軟式野球のチームに入っていたが、対戦相手を探すことに労力がかかっていた。
- ・私設リーグの存在を知り、既存のリーグに参加した。
- ・3年前、リーグ運営者が辞任し、自身がリーグ代表となり運営を引き継いだ。
- ・楽しく野球をやりたい人たちのために、支援をしたかった。

B リーグの目標、どうあるべきか

- ・たくさん野球をして楽しんだチームが勝ち、というリーグでありたい。
- ・自分のチームのメンバーだけではなく、他チームの人と試合をするなどして、一緒に野球をすることの楽しさを感じてもらいたい。

リーグの運営知識、ルール等の決め方

- ・リーグとして、参加チームは何かをしなくてはならない、という強制的な決まりは設けていない。
- ・お互いのチームがマナーを守ることが大前提であるが、リーグとして数チームが集まる以上はある程度の決まりごとは必要である。
- ・基本的にはチーム同士の話し合いで試合の段取りやルールは決めてほしい。

B リーグの運営者として力を入れている点

- ・リーグのウェブサイトを使って SNS のような楽しみの場を作り出し、参加チームに野球という楽しみの共有をしてもらうこと。
- ・以前はリーグのウェブサイトの更新間隔が遅かったが、自身が代表者になってからはウェブサイトを作り変え、毎週更新するなど、なるべくリアルタイムに沿うような更新頻度になっている。

B リーグ運営の苦勞、運営の問題点

- ・リーグに加盟はしているものの、年間でほとんど試合を実施しないチームがあること。リーグ代表者としてそうしたチームに試合をするように喚起することなどはないが、せっかく参加しているのだから、少しでも試合を実施してほしい。
- ・最も気にかけている点は、年間、リーグ内で何試合実施されたのかという試合の総数。
- ・参加チーム数が 40 チームと多く、試合数の格差によって順位が決まってしまうので、あまり試合を実施できないチームはモチベーションがあがらないのではないかと懸念している。

運営年数経過によるリーグ内での変化

- ・参加チームの競技力が向上した。
- ・リーグ内での事務的な連絡に対しても参加チームの反応が早くなった。
- ・参加チームが、インターネットを使うことによるやりとりに慣れてきた。

B リーグの存在意義、参加チームにもたらしている利点

- ・試合の勝ち負けという実際の結果より、参加チーム同士が試合をしてどのような成績を残したのかという記録を、ウェブサイト上に記録して次回への参加意欲を高められること。
- ・試合数、日程の強制はしていないので、気軽に近隣の対戦相手を探せる場として。
- ・私設リーグが、全軟連主催大会とは別の 1 つの大会としての活動の場になっていること。
- ・登録料が安く、いつでもやりたいときに野球の試合ができるようなきっかけの場になっていること。

B リーグに参加しているチームの特徴、参加チームの反応

- ・とにかく強くなりたい、試合で勝ちさえすればいい、というチームは参加していない。
- ・職場仲間で結成しているようなチームは参加していない。
- ・野球のユニフォームではなく、ジャージやスニーカーで試合に参加する人もいる。
- ・参加チームが、リーグの試合を公式戦として扱ってくれている。

・全軟連主催試合と B リーグの相違 (表 5-2)

- ・リーグ制は、負けても違うチームと試合ができるため、試合数を一定に確保できる。
- ・リーグでは試合時間に制限を設けていないので、試合当日の状況によって決めて良い。
- ・リーグは全軟連主催試合に比べ、安価に試合をすることができる。
- ・リーグはチームの正規メンバー以外の選手も、試合に出場することを認めている。
- ・リーグは、参加チームそれぞれがグラウンドの予約と試合の日程を決めるため、時間・空間的な強制がない。
- ・負けたら終わりという緊張感の意味で、全軟連の試合がプレーヤーにとっては本番の試合という認識であると感じる。

表 5-2 全軟連主催試合と B リーグの比較

	Bリーグ	全軟連主催試合
試合形式	リーグ制	トーナメント制
試合時間	時間制限なし	1時間30分
参加料金	年間1,000円	1大会あたり2~3万円
正規メンバー以外の 試合出場	可	不可
試合日程・会場	自由	強制

今後の B リーグの方向性、予測

- ・試合の実施数増加と、リーグに参加しているチーム全てに試合を実施してほしい。したがって、リーグ全体の意欲をいかにして上げられるかという仕組みや仕掛けを様々に考えていきたい。
- ・将来的には他の私設リーグとの交流戦なども企画してみたい。

軟式野球、私設リーグ全体について感じること

- ・私設リーグは、新しいリーグが登場し次第に消え、また登場するというような、設立と消滅を繰り返していくのではないだろうか。
- ・他のリーグの運営方法や状況について知りたいが、知る機会や手段がない。
- ・個人が運営するということで、営利目的で運営をやるわけではなく、リーグ代表者が運営を辞めてしまったらリーグが終わってしまうが、こうした私設リーグに対してのニーズは絶対にあると思う。

5.2 面接調査の結果から得られた私設リーグの運営について

私設リーグの成り立ちについて

私設リーグは、全軟連の試合がトーナメント制で行われることによって勝ちあがれないチームの試合数が十分に得られないことや、対戦相手を思うように見つけることができないこと、野球場の予約が休日・祝日に集中してしまい個々のチームでは予約取得数・活動場所の確保に限界がある、といった状況から、そうした問題を解決したいというニーズを持ったチームが生まれることによって発生する。

私設リーグの運営にあたり不可欠な条件

①リーグ独自のウェブサイトの開設と活用

今回調査した私設リーグはどちらも独自のウェブサイトを開設している。

2000年代前半からの急激なインターネットの普及による恩恵を受け、無償で利用できるレンタルウェブサイトのフォーマット等を利用し、以下のようにウェブサイトを活用している。

- どのようなチームがリーグに参加しているのかを公開する
これによって参加チームの活動範囲や実力を知ることができる。
- リーグに加入する際の条件の提示
活動範囲や連絡手段等の条件を提示し、一定の活動レベルに達しているチーム同士を集めることによって円滑なリーグ運営を行っている。
- 試合のマッチメイクを行う掲示板の活用
リーグ参加チームのみが使える掲示板をウェブサイト上に用意し、参加チーム同士がいつでも連絡を取り合ったり日程調整をして試合を行ったりできる環境を整えている。
- 参加チームの成績の公開、順位付け
参加チームの勝敗、勝ち点といった成績をウェブサイト上で管理し、頻繁に更新することによって参加チームがリーグの試合を消化することに対しての活動意欲や、他チームと一緒に競い合う楽しさを生み出している。

②ルールの設定

個人が運営を行う私設リーグであるために、運営責任の曖昧さや当事者間でトラブルが発生したときに第三者がいなかったといった事態が発生する場合や、参加チーム同士が円滑にリーグの活動を行うための共通認識として、一定のルール設定が必要になる。

代表者のルール設定の意識として語られたのは、ルールは参加や活動を強制したり拘束したりするものではなく、ある一定の範囲内であれば自由に活動をしてよい、といったものであった。

重要なものとして挙げられたのは、

- ・リーグとして参加チームに試合会場や試合日程の強制をしないこと

私設リーグは、全軟連のように行政などと共同で試合会場と日程を強制的に確保・決定することができないといった理由もあるが、個々のチームの都合に合わせて試合ができることが参加チームにとっては気軽に参加できる場となり、私設リーグの意義として語られた。リーグの試合消化には例えば4月～11月までに9試合を消化する、という決まりを設ける場合にも、期間内であればいつでも試合を実施してよいというルールによって、各チームのペースによって試合の実施ができるようになっている。

- ・ユニフォームや用具に関して使用制限をかけない

全軟連主催の試合では、どのようなチームも必ずメンバー全員が同じデザインのユニフォームで臨まなければならないことや、必ずヘルメットを着用しなければならない、といったことが定められている。

私設リーグでは同一チーム内でのユニフォームの違いを許可したり、必ずしもユニフォームでなくてもよいというルールを予め定めてしまうことで参加チーム同士がユニフォームを揃えることや用具を全て揃えなければならない、といった負担を減らして試合を実施しやすくさせると同時に、チーム同士が用具に対しての協議、申し合わせをする手間を省かせることを可能としている。

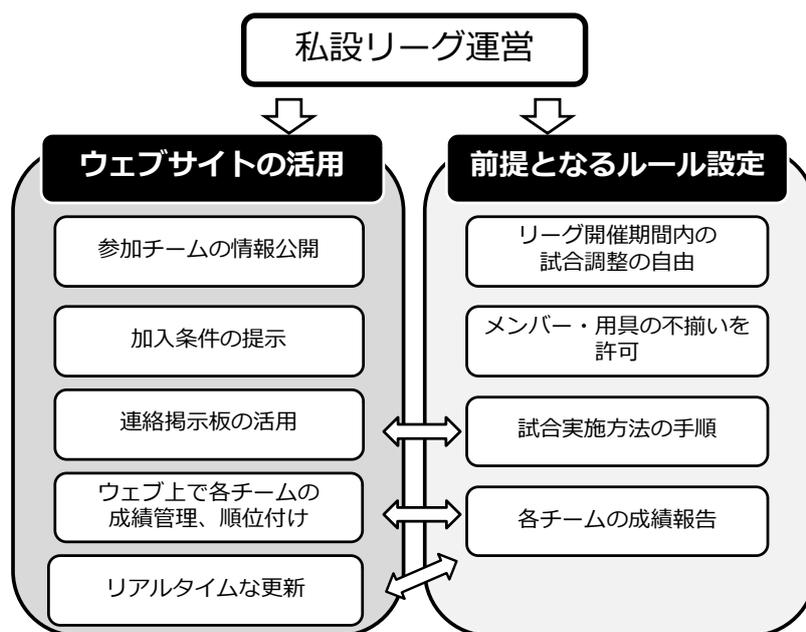


図 5-1 面接調査から得られた私設リーグ運営

私設リーグを運営する意識、意義

私設リーグの運営で重視することや意義として語られた意識で共通することは、

- ・野球を楽しめる仲間作りに貢献したい
- ・安く手軽に野球ができる機会をつくりたい
- ・私設リーグは一発勝負の全軟連の試合と、順位の決まらない普通の練習試合との中間に位置しているので、緊張感と手軽さを併せ持った仕組みである

という3点であった。

野球を楽しめる仲間作りに関しては、ただ試合を実施する機会を増やすということではなく、長年に渡って信頼関係を築き、共に野球をし、楽しみを共有できるチームメイトや他チームの選手との繋がりを作って、野球を通じてコミュニケーションをして欲しいという意味が込められている。

安く手軽に野球ができる機会に関しては、全軟連主催大会への参加が年間で数万円かかり、勝ちあがれないチームは高い金額を支払ったにも関わらず1回戦で負けてしまうかもしれないという状況から、私設リーグでは参加費を低額に設定し、回収した金額はチーム同士の交流のイベントや賞品、リーグ運営に最低限必要な事務費に充て、参加チームの負担にならないような手軽な大会として運営をしたいという意識のもとで運営されている。

軟式野球の中で私設リーグが果たす役割としては、全軟連の主催試合がトーナメント制で行われることに対して、私設リーグでは参加チーム全てと試合をすることができるため、実力に恵まれないチームであっても一定の試合数を確保できること、全軟連の試合では勝たなければ次の試合ができないため、チームの中で実力に劣るメンバーを試合に出場させにくい私設リーグでは勝ち負けに関わらず試合をする機会を獲得できるため、チーム内の様々なメンバーを試合に出場させられる機会を得られること、野球愛好者が集うウェブサイトの掲示板等で公募する練習試合よりも、私設リーグという1つの大会として順位や成績が決定する試合を行うという意味で、より緊張感を保って活動ができることが挙げられた。

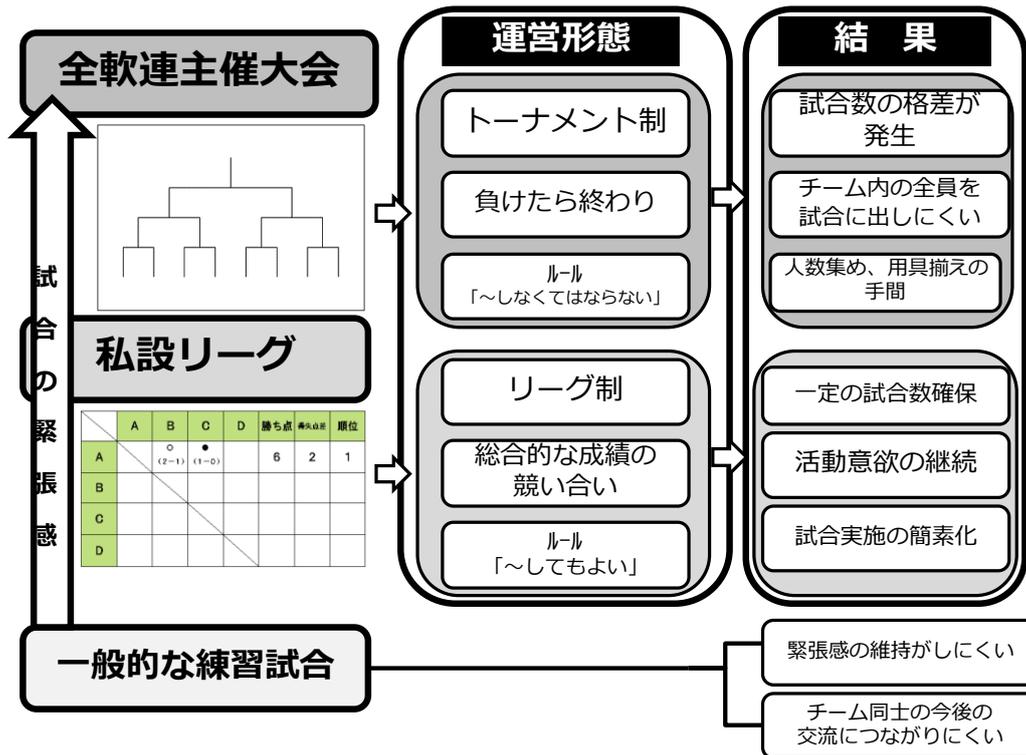


図 5-2 試合開催における私設リーグの役割

私設リーグの運営に関して問題となること

私設リーグを運営していくにあたっての苦労や問題点となっていることで2名の代表者から得られた発言で共通することは、リーグとしてのルールやシステムを作ることよりも、参加チームがいかにリーグで積極的に活動をするのか、いかにリーグに参加するということの意義の認識を各チームに持たせられるか、ということであった。

A リーグの問題点として語られたのは、

- ・年々、チーム同士の信頼関係を築くのが難しくなっている
- ・チーム同士が協力し合ってリーグの試合を消化しようとする姿勢が、揺らぐときがある
- ・必ず参加してほしい年2回の代表者会議にも、チームの代表者が現れないことがある
- ・リーグの運営に対して全く関心のないチームがある

ということであった。

A リーグは18チームを実力によって1部リーグ、2部リーグと分けてリーグ戦を行っており、どちらの部門でも年間の試合数は1チーム当たり10試合未満となる。したがって原則として参加チーム全てがお互いに必ず1回対戦し、最終的には全チームが同じ試合数を消化するようなルールに設定している。この仕組みの場合には、参加チームのリーグ試合消化に対する協力姿勢が不可欠であり、全てのチームが情報を出し合い調整をしながらリーグを進行させなければならない。しかし、予め決めていたリーグの試合が一方のチームの事情によって中止になったり、当日の天候状態によって急遽会場の場所が変更になった場合に一方のチームが来ないことがある、などの事態が発生するとリーグの試合消化に対して影響が出るため、なるべくそうした事態を発生させないような信頼関係をリーグ内のチームが築く必要がある。リーグに参加した当初は一定のペースを維持して活動ができるものの、次第にリーグ内でのペースに合わせる事が難しくなった場合にはリーグから脱退するチームが出てくるなど、他チームと協力し合ってリーグを作り上げていくという意義の認識、共有が大きな問題点であると語られた。

Bリーグの問題点として語られたのは、

- ・リーグ内での試合の実施数を増加させたい
- ・リーグに参加しても、1年間全く試合をしないチームがいくつかある
- ・チーム数が多いため、下位のチームのモチベーションが低下しているのではないかと

であった。

Bリーグの場合は全てのチームが必ず一度は試合を行い、一定以上の試合数を行う必要があるというルールや仕組みをとっておらず、参加チームの間で試合数に関しての違いが発生することを許容している。

参加チームが40チームと多く、上記のAリーグのような実力によるランク分けといったことをしていないために全チームが同数の試合消化をすること自体がほぼ不可能であるといった理由もあるが、第一としては、参加チームそれぞれが好きなきに試合をしてほしい、というリーグ代表者の意識がある。この仕組みの場合には、上記のAリーグのような参加チーム同士の信頼関係よりも、それぞれの参加チームがチーム活動に対してどれほど積極的であるかが重要となる。

参加チーム数が多くても自主性に任せているがゆえに、各チームの活動意識が低ければ試合が実施される機会が増えず、リーグ戦であるからこそその試合数の確保という役割が果たせないことになる。リーグ代表者として、ウェブサイト等を活用しながら参加チームのやる気をいかに向上させられるか、活動意欲や頻度の低いチームに対してどのようなフォローをするのかという仕組みや仕掛けを様々に試行錯誤しながら運営を行っていると言われた。

軟式野球、私設リーグに関して感じること

私設リーグ代表者から語られた軟式野球や私設リーグ全体に関することは以下のことであった。

- ・野球は最低 9 人集めなければ試合ができず、人集めや日程調整に非常に手間がかかる
- ・定期的に活動ができる基盤を持ったチームが少なくなっていると感じる
- ・全軟連の主催試合への参加チームも減っている中で、全軟連はこのままの運営でいいのかという疑問がある
- ・個人が運営する私設リーグは、代表者が辞めてしまうとリーグ運営が成り立たなくなるリスクが大きく、普段は社会人として働きながら運営していくことは困難も多い
- ・今後、個人が運営する私設リーグが次々と発生し拡大していくことは難しいと思うが、こうした仕組みに対してのニーズや、運営する意義は大きいと感じる

まず、野球という競技は 1 チーム最低 9 人集まらなければ試合をすることができないという点で、普段は社会人として働く人々が休日に同じ時間、同じ場所に 9 人以上集まるということ自体が困難であり、人々のライフスタイルが変化する中でそれだけの人数を集められるチームが減ってきているのではないかとということであった。全軟連の主催試合は試合会場と日程を強制的に確保するため、各チームが自分たちで対戦相手を探したり野球場を確保しなくていいということが、軟式野球の歴史においてはプレイヤーに対して貢献を果たしてきた事項として扱われているが、逆に、現在では土曜日、日曜日、祝日等の休日に必ずしも 9 人以上を集めることができないというチームが増えたために全軟連の主催大会・試合に対しての登録チームが減ってきているのではないかとということであった。

このような状況の中で、私設リーグは各チームの協議によって試合会場や日程を決定して参加できる大会として、全軟連主催大会では不可能な条件を実現していると言える。

ただし、個人が運営する私設リーグは運営の負担が代表者に集中してしまうことで、リーグ代表者が辞めてしまうことによるリーグ崩壊のリスクが大きく、参加チーム同士の協力が必要不可欠である。したがってこうした仕組みがすぐに発展するとは考えにくいですが、野球を楽しむ人々自身が活動の場を作り上げていくという意味で運営する意義は大きく、全国にそうしたリーグがある以上、私設リーグに対してのニーズはあるのではないかと、ということであった。

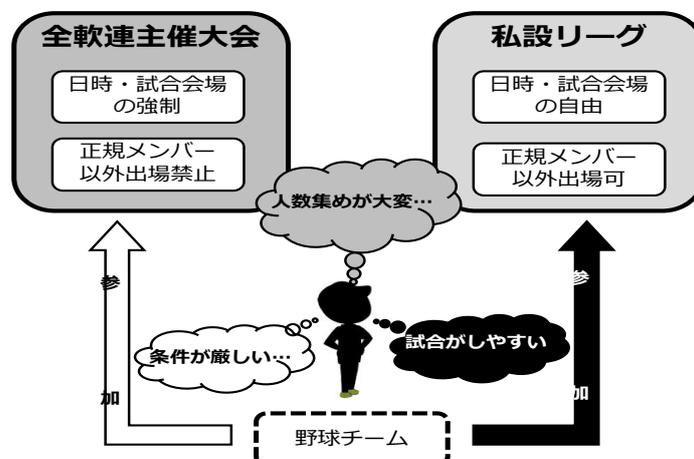


図 5-3 野球チームから見た全軟連と私設リーグ

A、Bリーグの相違

面接調査から得られた2つの私設リーグの運営、相違は以下の通りである。

表 5-3 2つのリーグの運営、相違比較

	Aリーグ	Bリーグ
運営のきっかけ	野球でのネットワーク作りを行いたかった	対戦相手となるチームを見つけにくかった
ルール作りの意識に関して	リーグ内で問題が起きるのを回避するため	年数経過による変更はあるが基本的には各チームの協議に任せる
運営の目標	信頼関係を築き、参加チームが継続して野球を続けられること	気軽に野球ができる場の提供
運営で重視している点	チーム同士のトラブル回避 Webサイトの有効活用	Webサイトの有効活用
運営の課題	チーム同士の信頼関係の構築 リーグへの参加意義の共有	試合開催数、参加率の向上 下位チームの参加意欲低下に 対しての懸念
今後の方向性	大会としてのリーグの価値の向上	リーグ全体の野球に対しての 意欲向上
リーグ内での試合消化について	原則として全チームが同数消化	試合数の格差を許容
理由	リーグ制度を重視しているから	各チームが自由に試合を開催してほしいから
リーグ内でのランク分けについて	1部、2部制度	なし
理由	実力が拮抗した試合をするため	全てのチームと試合ができる 機会を与えるため
参加料について(年間)	¥10,000~15,000	¥1,000
理由	1つ大会としてしっかり運営したい 会議の開催や賞品の授与等を通じて 交流がしたい	いつでも気軽に参加できるリーグ として活用してほしい
ユニフォームや用具について	全員統一する必要はないが、 ユニフォームは着てほしい	特に指定はない
理由	しっかり試合をやる前提として	気軽に野球をする機会を与えたい

Aリーグの特徴としては、リーグを円滑に行うためには各チーム同士の信頼関係が不可欠であり、余暇に楽しむ軟式野球であっても真剣に取り組む意識を持って活動をしたい、であった。

Bリーグの特徴としては、ルール、試合数等の拘束が非常に少なく、参加チームに対していかに気軽に、好きな時に野球ができる仕組みを与えられるか、であった。

5.3 アンケート調査の結果と考察

Aリーグに参加する14チーム、Bリーグに参加する7チームのそれぞれに対して個別にアンケートを行った。

ここではアンケート結果の記載と考察を行う。

設問1 軟式野球をする上でのチームの活動範囲

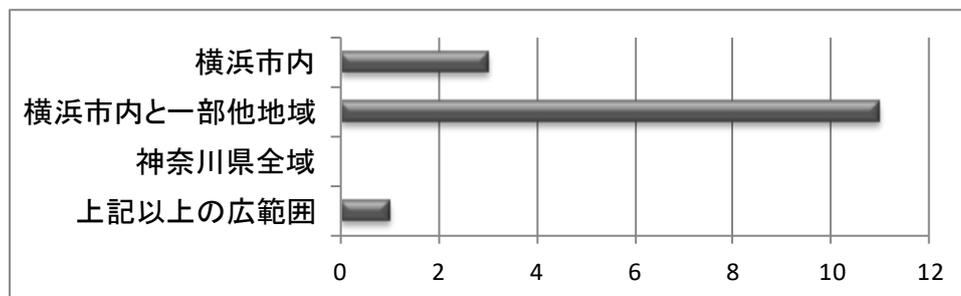


図 5-4 Aリーグ参加チームの活動範囲

14チーム中、11チームが横浜市内と一部他地域で活動していると回答した。横浜市内のみと回答したチームと合わせると、ほぼすべてのチームは横浜市近郊で活動をしている。

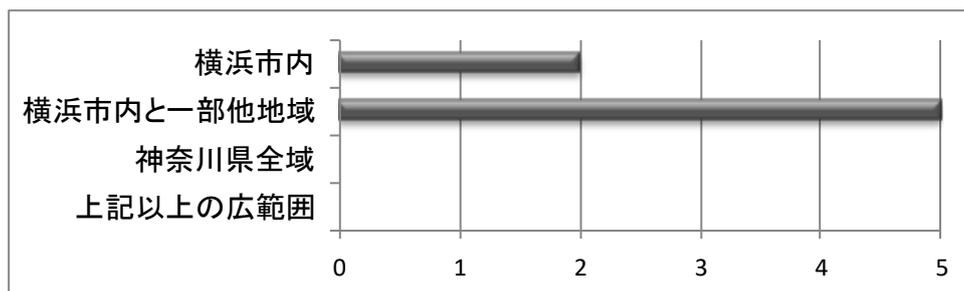


図 5-5 Bリーグ参加チームの活動範囲

7チーム中5チームは横浜市内と一部他地域で活動していると回答した。横浜市内のみと回答した2チームを合わせると、全てのチームは横浜市内近郊で活動をしている。

普段の活動範囲において両リーグの参加チームに共通する回答として最も多かったものは、横浜市と一部他地域での活動という回答であった。横浜市内だけでは試合会場等が確保できない場合や、都合のよい対戦相手が見つからなかった場合などは、横浜市の近隣である横須賀市、藤沢市、川崎市といった地域でも活動を行っていると思われる。あまり活動範囲を広げてしまうと移動の負担が増えるために、神奈川県全域やより広い範囲で活動をしているというチームは1チームのみであった。

設問2 チームとして月にどの程度活動回数があるか

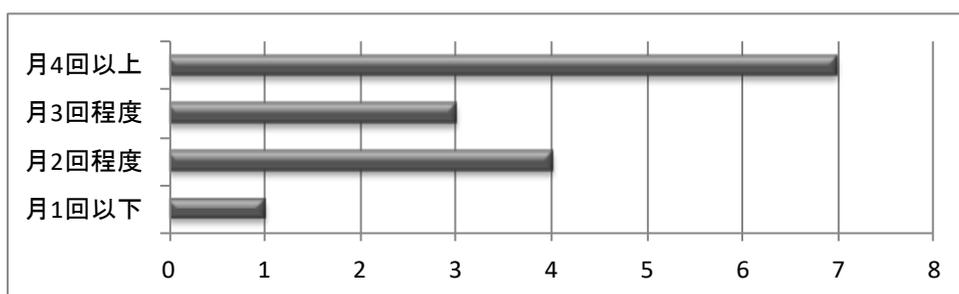


図 5-6 A リーグ参加チームの活動回数(月)

14 チーム中 7 チームは月に 4 回以上チームとして活動をしていると回答した。月に 1 回以下の活動のチームは 1 チームであり、ほとんどのチームは月に 2 回以上は活動をしている。

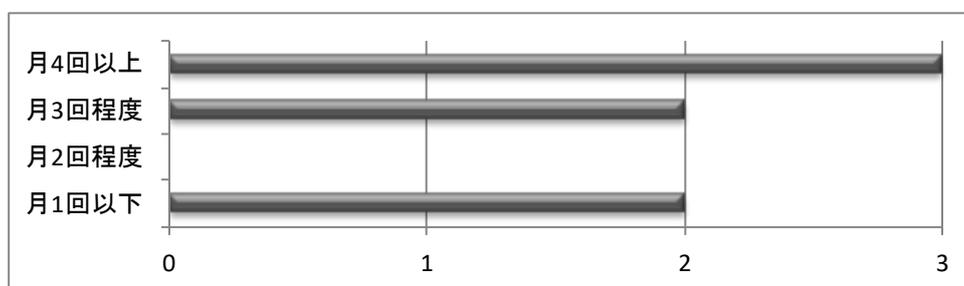


図 5-7 B リーグ参加チームの活動回数(月)

最も回答が多かったのは、月に 4 回以上チーム活動をしている、であった。7 チーム中 5 チームは月に 3 回以上の活動をしている。

チームとして月に何回活動しているかに関して、両リーグの参加チームに共通して最も多かった回答は月に 4 回以上活動をしている、であった。土曜日、日曜日のどちらかに活動を行っているとしても、週に 1 回は必ずチームとして集まり活動をしているということになるため、私設リーグに参加しているチームは非常に活発に軟式野球をしていると言える。月に 3 回程度と回答したチームも多く、月 4 回以上と合わせると全体の 7 割弱は月に 3 回以上の活動を行っている。

設問3 活動の内容に関して、試合と練習のどちらが多いか

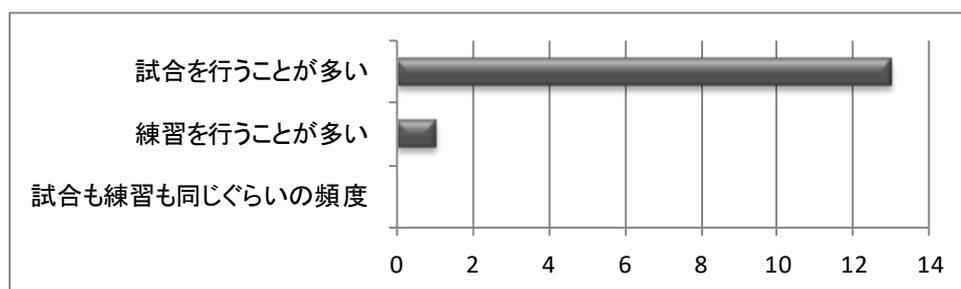


図 5-8 A リーグ参加チームの活動内容

14 チーム中 13 チームは、普段のチーム活動において試合をする機会のほうが多いと回答した。

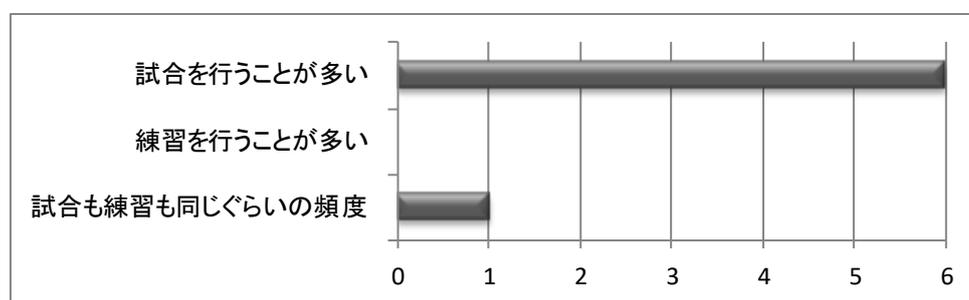


図 5-9 B リーグ参加チームの活動内容

7 チーム中 6 チームは、普段のチーム活動において試合をする機会のほうが多いと回答した。

両リーグに参加するチームの 9 割以上は、軟式野球の活動で試合を行う機会のほうが多いと回答した。今回のアンケート結果に限れば、成人が余暇に行う軟式野球のチーム活動はほぼ試合を行うことであると言える。

設問 4 軟式野球をする上で、どのような苦勞や問題があるのか

設問 4 では A リーグ参加チームに対しては 6 つの項目に関して当てはまるもの上位 3 つを選択してもらった。B リーグ参加チームに対しては 4 つの項目の中から当てはまるもの全てを選択してもらった。

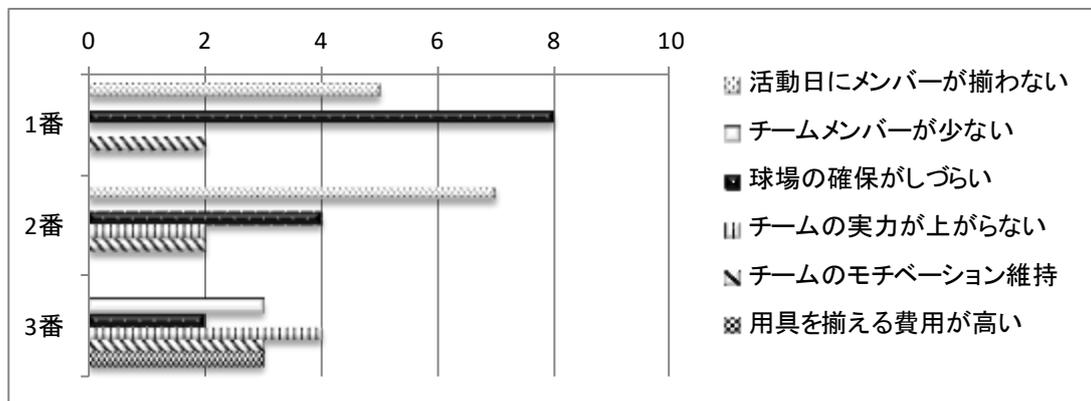


図 5-10 A リーグ参加チームの普段の活動における苦勞

最も苦勞していることとして、野球場の予約がとりにくく活動場所を確保しづらいことが挙げられている。2 番目としては、活動をする日にチームのメンバーが揃わないことが挙げられている。

野球場の確保の困難と活動日のメンバーの不揃いは、1 番目、2 番目においても上位に選択されている。

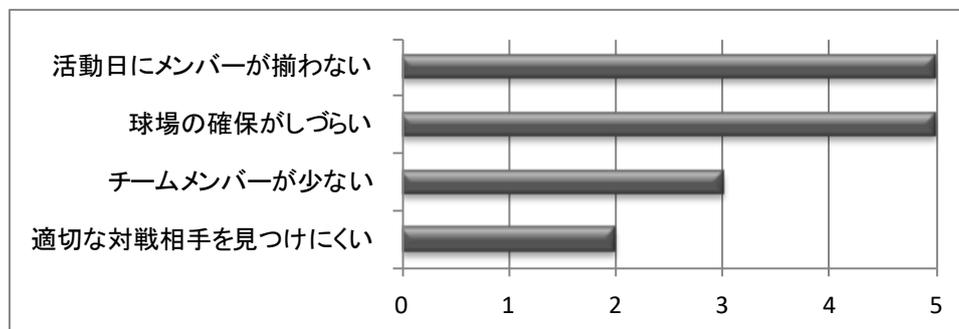


図 5-11 B リーグ参加チームの普段の活動における苦勞

7 チーム中 5 チームは、軟式野球の活動をする上での苦勞として活動日にメンバーが揃わないことや、試合や練習の会場となる野球場の予約がとりにくいと回答した。

両リーグに参加するチームが普段の活動で苦勞する点で回答が集中したのは、野球場を利用するための予約がとりにくく活動場所を確保するのが難しいということと、活動当日に思うようにメンバーが揃わないということであった。野球場については 2008 年の文部科学省の調査によると神奈川県は 2008 年時点で 170 の野球場を所有しているが、¹⁰⁾ 全国では 14 番目の数字であり、近隣の東京、埼玉、千葉と比較しても少ないことから、土曜日、日曜日などの休日に予約が集中してしまうことによって倍率が高くなっていると思われる。

活動日にメンバーが揃わないということに関しては、同じくチームのメンバーに関わる質問として、そもそもチームのメンバーの絶対数が少ないのかどうかということも質問を行った。結果は、チームのメンバーが少ないということに対して回答をしたのは全体の2割強であり、7割弱のチームはメンバーの数自体に苦労はしていない。したがって、チームメンバーの数自体は十分であるが、実際に活動をしようとする日に試合を実施できるだけの人数が集まらない時がある、というのがチーム運営をする上での重大な問題であると言える。

設問 5 なぜ私設リーグに参加しようと思ったのか

設問 5 では、A リーグ参加チームに対しては 5 つの項目の中から当てはまるもの全て、B リーグ参加チームに対しては 6 つの項目の中から当てはまるもの全てを選択してもらった。

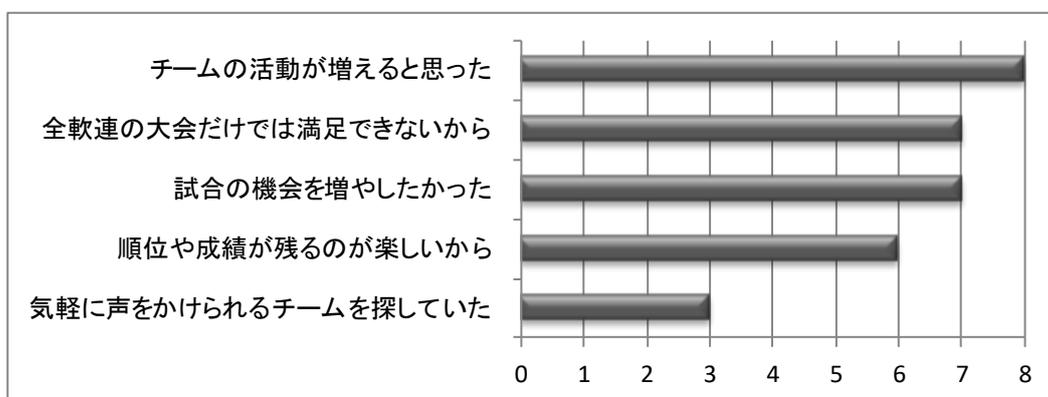


図 5-12 A リーグ参加チームの加入動機

最も選択されたのは、私設リーグに参加すればチームとしての活動機会が増えると思ったから、であった。以下は全軟連の主催試合だけでは足りない、試合の機会を増やしたいという回答が多く、いかに試合をする機会を得られるかということについての項目に回答が集中した。

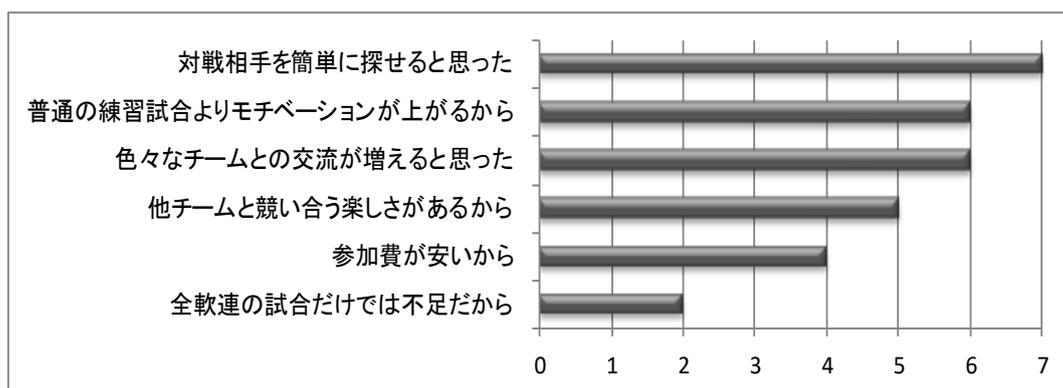


図 5-13 B リーグ参加チームの加入動機

7 チーム全てが私設リーグに参加することによって対戦相手が楽に探せると思ったと回答した。7 チーム中 6 チームは、リーグの試合は練習試合よりもモチベーションがあがると思った、リーグに参加する色々なチームとの交流が増えると思った、という回答をした。

A リーグと B リーグの参加チームへの質問に対しての項目は、訪ねた文言が若干異なるものになっているが、設問 3 において軟式野球の活動とはほぼ試合を行うことである、ということが明らかになったため、設問 5 において共通する回答として最も多かったのは、対戦相手を探しやすくなり試合をする機会が増えると思ったから私設リーグに参加しようと思った、ということであった。次に共通する回答として多かったのは、私設リーグの試合は結果によって他の参加チームと順位を競ったり記録がウェブ上に残るという点で、単に練習試合を行うよりもチームとしての活動意欲が上昇するのではないか、といった理由から私設リーグに参加しようと思ったチームが多かった。

全軟連の主催試合だけでは満足な活動ができないから私設リーグに入ろうと思った、という回答についてはAリーグとBリーグにおいて差が見られ、Aリーグでは上位の理由として、Bリーグでは下位の理由として回答された。Aリーグでは原則として全チームが同数の試合消化を行うという仕組みをとっていることから、参加チームも試合の消化に対しての意識が高いと思われる。したがって参加してもあまり試合数の増加が見込めない全軟連の主催試合と対比させてこうした回答が多くなったと予想される。Bリーグにおいては参加チームの好きな時に試合を実施させ、チームごとの試合数のバラつきを許容していることから、全軟連の主催試合との対比ではなく、いかに自分達のチームの活動ペースに合わせて試合をする機会が増えるかどうか重点が置かれているために、下位の回答になったと見られる。

設問6 私設リーグに加入してどのような利点があったか

設問6ではAリーグ参加チームに対しては5つの項目に関して当てはまるもの上位3つを選択してもらった。Bリーグ参加チームに対しては4つの項目の中から当てはまるもの全てを選択してもらった。

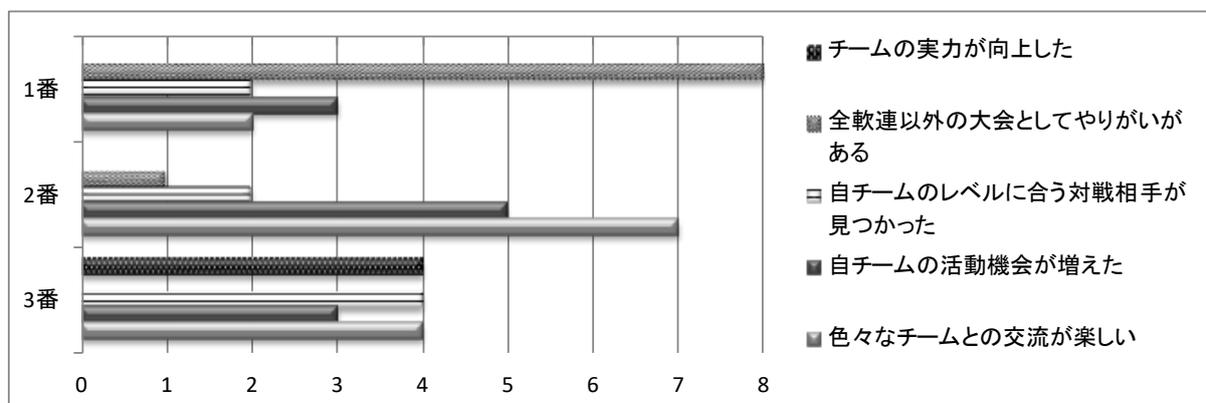


図 5-14 Aリーグに加入したことによる利点

1番目にもっとも選択されたのは、私設リーグは全軟連主催以外の大会としてのやりがいがあるという回答であった。2番目には私設リーグに入ることによって色々なチームと知り合い、交流が楽しくなったという回答が多い。1番目、2番目共に上位に選択されている回答として、私設リーグに加入したことで自分のチームの活動機会が増えた、ということも挙げられた。全体的に回答数の多いものとしては、私設リーグに加入したことで自分のチームとのレベルにあった対戦相手が見つかった、というものが挙げられた。

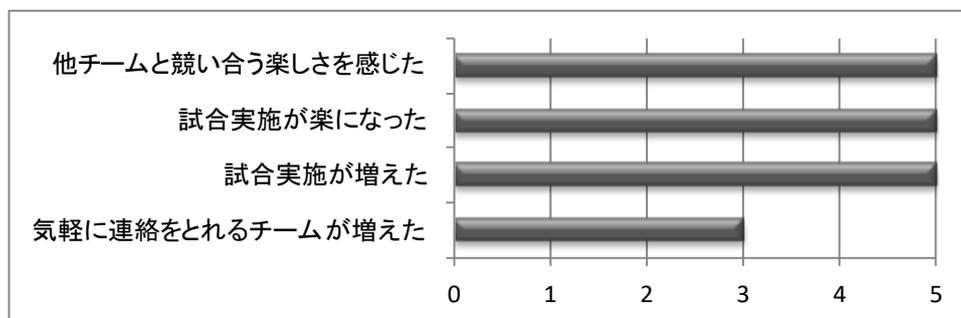


図 5-15 Bリーグに加入したことによる利点

実際に私設リーグに参加してみると、他チームと競い合う楽しさ、試合実施が楽になった、試合実施の機会が増えた、といったことが利点として挙げられた。

A リーグ参加チームは設問 5 において私設リーグに加入しようと思った理由として、全軟連の主催試合だけでは満足な活動ができないから私設リーグに入ろうと思った、という項目が上位に回答されており、A リーグ参加チームの多くは全軟連の主催大会ではなく、より気軽に参加し活動の継続ができる大会を求めていることになる。したがって、設問 6 において実際に私設リーグに参加してから感じる利点として、私設リーグで試合を行い活動することは全軟連の主催ではないもう 1 つの大会としてのやりがいを感じている、と回答したチームが最も多く、これは全軟連の主催大会への参加では実現できない試合数の増加や、やりがいを私設リーグ参加によって満たしていると言える。その他、A リーグは参加しているチーム数が 18 とそれほど多くなく、1 部と 2 部のランク分けをしていることもあって、リーグ内の同じチームと何度も連絡を取り合ったり情報交換をする機会が多くなることから、リーグに加入してみるとそうしたリーグ内の他チームとの交流に楽しさを感じるようになったという回答も多かった。

B リーグ参加チームに関しては回答にあまり差が付いていないが、リーグに入ることによって近隣で活動する他チームを見つけやすくなり、対戦相手を探す手間が省け試合を実施する機会が増えたという回答が多数であった。ある程度の試合数をリーグ内のチームと行うことによって次第にウェブ上での成績のランク付けに関心に移り、他チームと競い合う楽しさを感じるようになると思われる。

設 7 私設リーグに加入後、チームの活動の中で私設リーグをどのような位置付けで扱うのか

設問 7 では A リーグ参加チームに対しては 4 つの項目に関して当てはまるもの上位 3 つを選択してもらった。B リーグ参加チームに対しては 5 つの項目の中から当てはまるもの全てを選択してもらった。

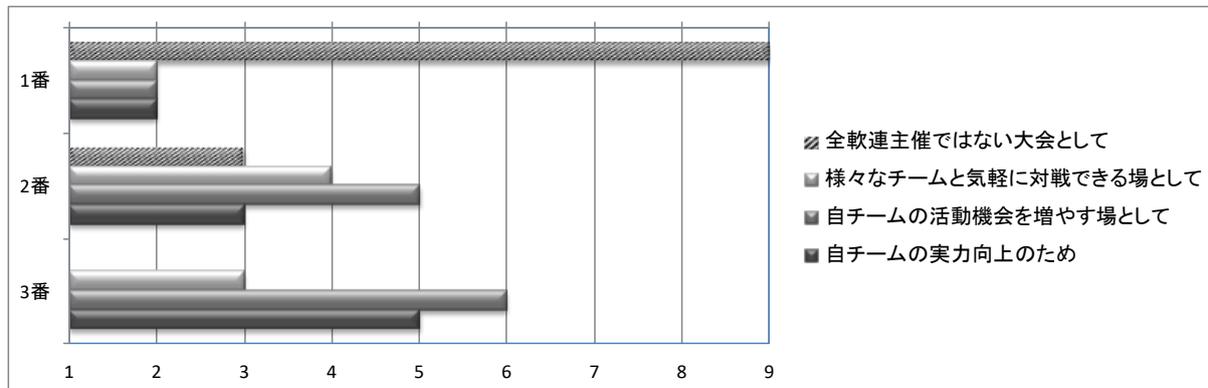


図 5-16 A リーグ参加チームのリーグ加入後の私設リーグの位置付け

今後、私設リーグを自分たちの活動の中でどのように位置づけるかに関して最も多かったのは、全軟連主催ではない大会として重要視する、という回答であった。2 番目には、自分のチームの活動の機会を増やす場として、が選択された。

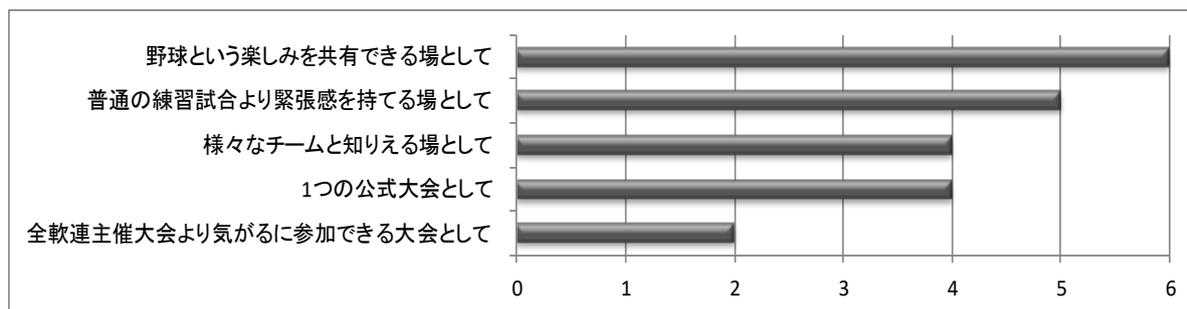


図 5-17 B リーグ参加チームのリーグ加入後の私設リーグの位置付け

7 チーム中 6 チームは野球という楽しみを共有できる場として私設リーグでの活動を続けたいと回答した。7 チーム中 5 チームはリーグとしての試合を普通の練習試合よりも緊張感を持てる場として活用したいと回答した。

A リーグ参加チームの回答で最も多かったものは設問 5 と設問 6 でも共通した、全軟連主催以外の 1 つ大会として重視するという回答であった。B リーグ参加チームに関しては、野球という楽しみを共有できる場、という回答が多く、自分達のペースで活動をしながらもリーグというものを通じて他のチームと試合を実施するなどして競い、野球を楽しみたいという回答であった。設問 7 においても全軟連主催大会と比較して私設リーグをどのように扱っていくかという意味では、A リーグ参加チームが上位の理由に、B リーグ参加チームが下位の理由として回答していることから、設問 5 や 6 でのそれぞれの回答と合致している。

設問8 どのような点でBリーグの良さを感じるか

設問8ではBリーグ参加チームに対して5つの項目の中から当てはまるもの全てを回答してもらった。

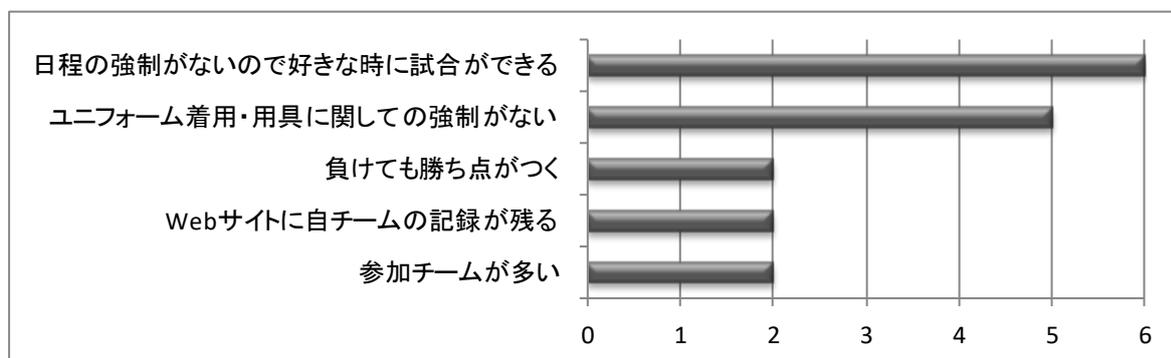


図 5-18 Bリーグに感じる良さ

7チーム中6チームは、Bリーグは試合消化の日程に関して強制がないので自分たちの好きな時に試合ができる点を良さとして回答した。7チーム中5チームは、Bリーグはユニフォームや用具に関する強制や使用制限がないため試合の実施がしやすいと回答した。

Bリーグではリーグ代表者の意識としても、参加チームには試合実施に関して特に日程的な強制をせずに、各チームがウェブサイト上の掲示板を利用しながら都合のよいときに試合を実施してほしい、というものが前提にあることから、参加チームも各々の都合に合わせて好きな時に他チームと試合を実施できる点に最も魅力を感じている。2番目には、Bリーグにはチームメンバー全員のユニフォーム統一や、ヘルメット着用の義務など、全軟連の主催試合で定められているようなルールがなく、気軽に試合を実施し楽しむことができるという前提で参加できるという点に魅力を感じている。

2つのリーグの参加チームに対してのアンケートによって得られた結果を表5-4にてまとめた。

表 5-4 アンケート結果のまとめ

	Aリーグ参加チーム(n14)	Bリーグ参加チーム(n7)
設問1 活動範囲	横浜市内と一部他地域	横浜市内と一部他地域
※備考	球場への移動に対して時間的、金銭的な負担にならない範囲	
設問2 活動回数	月に4回以上	月に4回以上
設問3 活動内容	試合をすることが多い	試合をすることが多い
設問4 活動での苦勞	<ul style="list-style-type: none"> ・球場の予約確保がしづらい ・活動日に十分な数のメンバーが揃わない 	
設問5 リーグへの加入動機	<ul style="list-style-type: none"> ・活動機会が増えると思った ・全軟連の大会だけでは満足な活動ができないから 	<ul style="list-style-type: none"> ・対戦相手を簡単に探すため ・普通の試合より意欲が上がる
設問6 リーグ加入による利点	<ul style="list-style-type: none"> ・1つの大会としてのやりがい ・他チームと知り合うのが楽しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・試合実施が楽になった ・他チームと競い合う楽しさ
設問7 リーグ加入後の位置付け	<ul style="list-style-type: none"> ・1つの大会として ・活動を増やす場として 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみを共有できる場として ・緊張感を持てる場として

Aリーグ参加チームに関しては、私設リーグを全軟連主催大会ではないもう1つの大会として意識し、他チームと共に私設リーグという大会を作り上げて楽しみたいという結果が得られた。

Bリーグ参加チームに関しては、私設リーグを気軽に参加でき対戦相手が探しやすいため、いつでも野球を楽しめる場であると意識し、他チームと試合をするなどして競い合い緊張感を保ちながらも野球の楽しみを共有できる場として活用したいという結果が得られた。

5.4 面接調査とアンケート調査から得られた私設リーグ運営のまとめ

・リーグ参加チームの活動範囲と活動回数について

私設リーグを運営する前提として代表者から語られた共通の認識は、なるべく安く、楽に野球を継続してできるように、ということであった。安さは、私設リーグへの参加が全軟連の大会に出場するよりも手頃であるという意味もあるが、野球をするにあたって用具を購入したり野球場に移動したりする負担をなるべく減らして活動をしたいという意味が強く、参加チームについても普段の活動範囲は横浜市と一部その他地域(川崎、横須賀、藤沢など)で活動をしていることから、なるべくチームの地元から近場で活動がしたいと感じている。対戦相手を探すためにはある程度範囲を広げなければならないが、私設リーグに加入することによって自分たちのチームと近い範囲で活動している他のチームと知り合うことができるきっかけになっている。

野球は試合を行う人数が他の競技に比べて多いことや、用具を揃える負担が多いため競技人口が減っている²⁾と見られていることから、チームとして定期的に活動することは他の競技に比べ困難であると思われるが、私設リーグに加入しているチームの多くは月に4回以上チームとしての活動をしていると回答した。私設リーグに加入することで活動機会が増えると思った、実際に加入してみると活動機会が増えたという回答があることから、私設リーグに加入する前も活動に対しての意識は高かったが、月に4回以上の頻度で活動ができるほどではなかったと見られる。

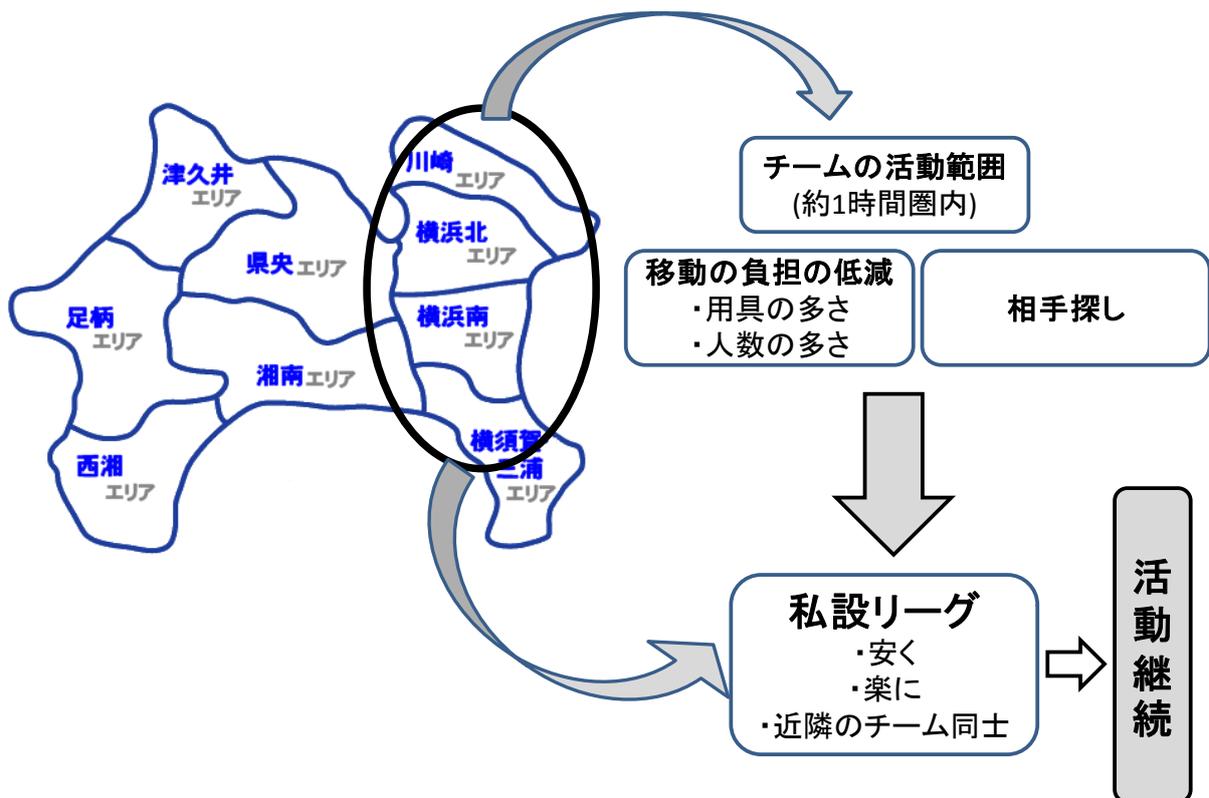


図 5-19 私設リーグ運営の前提と参加チームの活動範囲

・リーグ運営者の設立動機と参加チームの加入意識について

私設リーグを運営するにあたって代表者から語られた背景は、野球場の利用予約がとりにくく、適切な対戦相手も見つけにくかったためチームとしての活動に問題意識を感じていたということであった。したがって、様々なチームと知り合いながら対戦の機会を増やし、継続して野球を楽しむ場を提供するために私設リーグを設立、運営に至った。対して、参加チームも多くが野球場の確保が容易ではないことを活動の問題点として回答し、私設リーグに加入しようと思った動機について、私設リーグに入ることによって活動の機会が多くなると思った、対戦相手を見つけやすくなると思ったと回答をしていることから、私設リーグが参加チームに提供しようとしているものと、参加チームが私設リーグに求めているものは合致していると言える。野球場の利用予約に関しては行政のスポーツ施設予約システム上、予約はチーム個々が行わなければならないために、知り合いのチームが増えたからといって自分のチームの野球場予約取得数が増加するという現象は起こらないが、それぞれのチームが確保した野球場の予約日時や場所などをリーグ内のウェブサイト上で公開し、都合のよいチームがあれば試合を組むということを相互で行うために、結果的には個々のチームの野球場予約数には限界があっても、相互に獲得した予約・利用枠において試合を行うために活動の回数が増えるという恩恵を受けられる、ということであった。

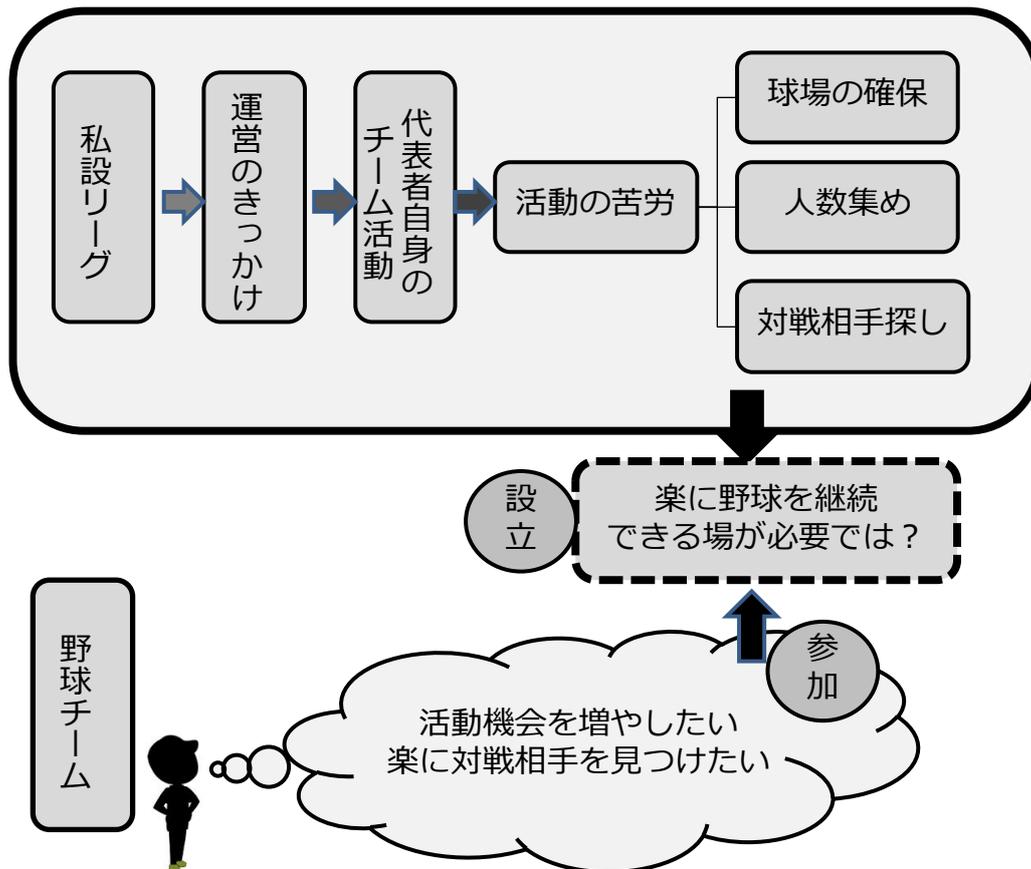


図 5-20 私設リーグ運営のきっかけと参加チームの意識

・リーグ運営者の目標と参加チームが感じる利点

Aリーグ代表者の目標は、チーム同士が信頼関係を築きながら1つの大会としてリーグを運営したいということであった。実際にAリーグに参加しているチームも、Aリーグ参加の利点を、全軟連主催ではない、もうひとつの大会としてやりがいを感じていることや、Aリーグを通じて他チームと知り合い、やりとりを重ねることが楽しいと回答している。今後の方向性についても、Aリーグ代表者は1つの大会として全軟連主催大会よりも価値のあるものを提供したいと考えていることから、参加チームも今後、Aリーグを1つの大会として重視して活動をしたい、と回答している。

Bリーグ代表者の目標は、気軽に野球を楽しめる場の提供であった。実際にBリーグに参加しているチームも、リーグに加入したことによって対戦相手を探すこと、試合実施が楽になったと回答している。Bリーグでは参加チーム個々の試合数にバラつきが出ることを許容しているが、参加チームはBリーグの良さとして、日程や場所の強制がなく、都合に合わせて自由に試合ができる点を最も評価している。

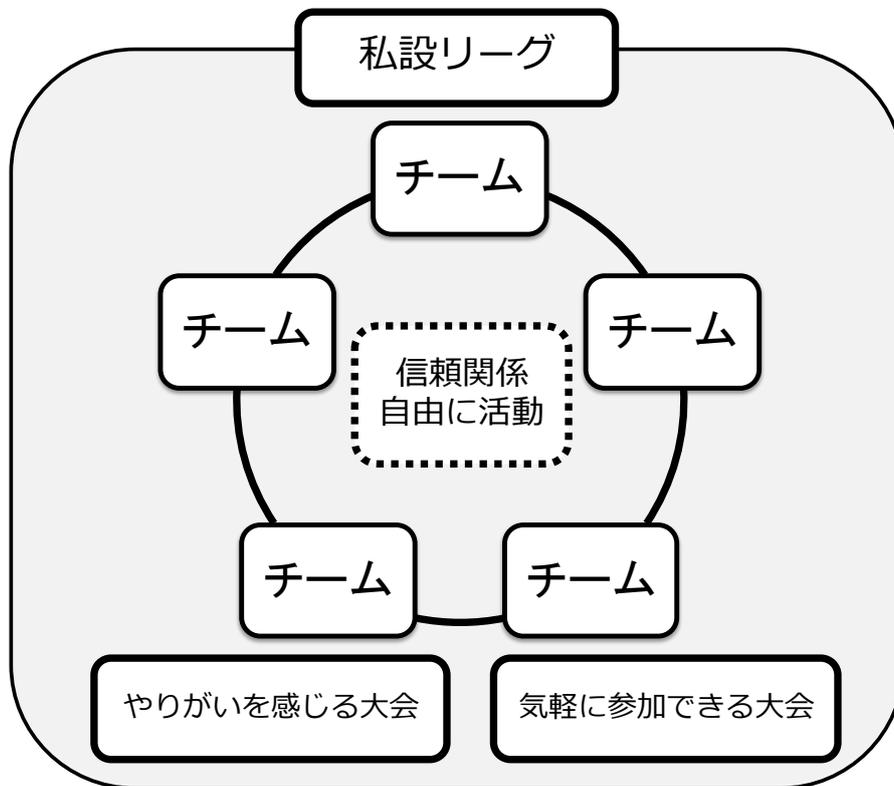


図 5-21 私設リーグ運営目標と参加メリット

・リーグ運営の仕組み、ルールについて

Aリーグではリーグに参加しているチームを実力によって1部、2部に分け、全てのチーム同士が各部の中で必ず1回対戦し、最終的には同数の試合消化をするというリーグの仕組みになっているためリーグ代表者のルール設定も、例えば、試合が成立・不成立になる条件や、本来はチームの正規メンバーではない人間を、試合を行うだけの人数が足りないなどの場合に補充するときなどにどのように扱うか、というような、チーム同士がトラブルをなるべく起こさず円滑にリーグ運営が行われるように決められている。リーグに参加する参加料金も、1チーム当たり年間1万円弱と若干高めではあるものの、1つの大会として私設リーグをしっかりと運営していくためにやや高めに設定し、リーグ会議や表彰式などを企画、会計については報告を行っている。Aリーグの参加チームも試合の消化やリーグ進行に対しての意識が高く、私設リーグを1つの大会としてやりがいのあるものと感じている。

Bリーグは試合数や正規メンバー以外の出場制限などを設けておらず、参加料金についても1チーム当たり年間1千円と手ごろであり、気軽に参加できるリーグとして仕組みを作っていることから、参加チームも以前より試合実施が楽になりつつも、リーグという場を通じて他チームと知り合い競い合うことに魅力を感じている。

全軟連の主催大会・試合では参加チームの不正防止や安全面に配慮して、出場チームや選手に対して厳しいルール制限が設けられている。(図5-21)

そうしたルールや、試合会場に必ず第三者として全軟連から派遣される審判員の監視によって試合が行われるが、チームのメンバーが足りない場合に他チームに登録されている人間を試合に出場させたり、当日の状況でやむなくユニフォームのデザインがチーム内で統一できなかった場合などは試合に出場することができず不戦勝・不戦敗になる場合もあり、チームにとって全軟連の主催試合に出場することはいくつもの条件を満たさなければならない。一方で私設リーグでは全軟連が禁止している他チームからのメンバー出場や同一チーム内でのユニフォームの不揃いを認可するなど、試合の実施に関する制限を極力なくし、気軽に試合を実施できるような前提を予め設定することによってチーム同士が楽に試合ができるようにしている。

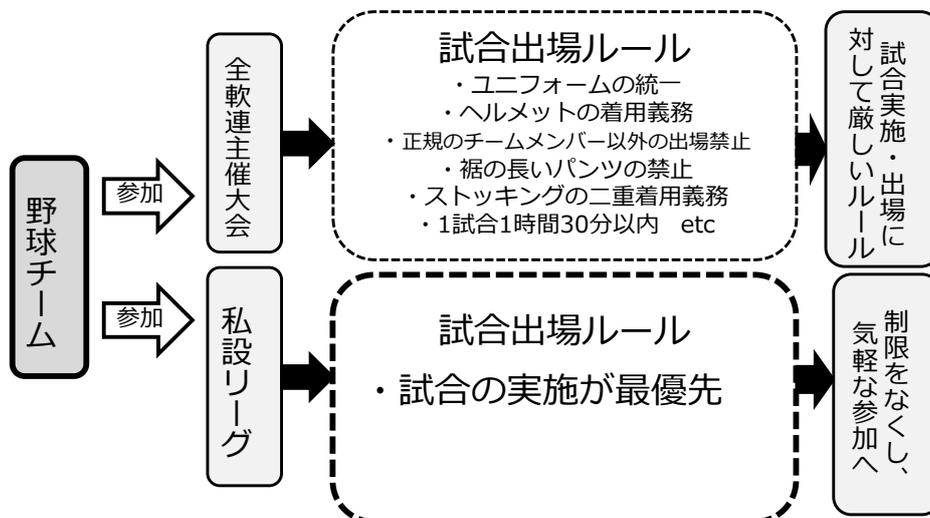


図 5-22 試合に関する私設リーグ運営ルール

・私設リーグと全軟連の主催する大会との比較

私設リーグの運営を、全軟連主催大会と比較して SWOT 分析にて行った。

表 5-5 私設リーグを全軟連大会と対比させた SWOT 分析

<p>Strength [強み]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーグ制度による試合数の確保 ・他チームとの総合的な成績の競い合い ・日程調整の自由 ・参加料金の安さ ・近隣他チームと知り合う場 ・易しいルール設定 	<p>Opportunity [機会]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全軟連の大会では満足できないチームの増加 ・全軟連の大会参加条件に適合できないチームの増加 ・クラブチームの増加
<p>Weakness [弱み]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーグ代表者の辞任によって、運営崩壊の可能性 ・トラブル時に常に第三者がいるわけではない ・球場の確保はチームの努力次第 ・同じチームとの試合が多くなり、新鮮味が減る 	<p>Threat [脅威]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全軟連がリーグ制度の大会を導入 ・全軟連が参加条件の規制緩和をする ・全軟連の大会参加料が安くなる

上記の SWOT 分析をもとに、クロス SWOT 分析を行った。

①強み(S)×機会(O)で私設リーグは何ができるのか

私設リーグの強みは大きく分けて、リーグ制による一定の試合数の確保、他チームとの成績の競い合い、試合実施・出場について全軟連に比べて簡易なルール設定である。私設リーグが運営されるにあたって機会となることは、職場チームではなく地域のクラブチーム(チーム内で休みの日程が合わせにくい、あまりお金をかけたくないなど)が増加、もしくは今より活発に活動をした、というときに全軟連のトーナメント制では試合数を確保できず、用具の完備などの参加ルールを全て満たすことも厳しい、といった場合に、自分たちの活動ペースで気軽に参加し、活動機会を増やせる場として私設リーグは貢献できる。

②強み(S)×脅威(T)で私設リーグはどのように脅威を回避し何ができるのか

野球チームが私設リーグに参加しなくなる可能性のうち最も高いものとしては、今後全軟連が主催大会にリーグ制の大会を導入することである。仮に年に 2 回程度(春・秋など)、4 チームほどのグループリーグ制で行う大会を導入すれば、トーナメント制で 1 回戦で敗退した場合に比べて 1 チーム当たり 4 試合増加させることができる。一定の試合数の確保という意味では全軟連の大会だけでも個々のチームが十分に活動ができる可能性もあるが、私設リーグにおいては自由な日程調整ができる点と、リーグ内のチームとは以降も長く付き合うことができ、野球を楽しむ仲間が増える、という点では単に全軟連の大会がリーグ制になることよりも参加の利点は大きく、チームにとって魅力を感じられる点である。

③弱み(W)×機会(T)で運営の弱点をどのように補っていくか

個人が行う私設リーグ運営の弱点としては、代表者の力量に大きく依存するという点とトラブルが発生したときに管理や責任が曖昧になるという点が挙げられる。一方で、全軟連の大会には参加しても満足に活動ができない、もしくは参加自体が難しいという場合に、そうしたチームが活動の機会を求めて私設リーグに加入する可能性は十分に考えられる。私設リーグの運営には参加チーム同士の協力と信頼関係が大切という点においては、積極的な活動の場を求めて私設リーグに加入するチームは他チームとの協力姿勢も高いと思われるため、逆に運営の曖昧さを残しつつチーム同士の協力を仰ぐ仕組みにしたほうがトラブルなく円満なリーグ運営ができる。

④弱み(W)×脅威(T)で私設リーグの存在意義をどこに見出すか

私設リーグが存在意義を問われる事態になるのは、大会運営にあたり責任の所在が明確な全軟連がリーグ制を導入し、野球場の確保も自動的に行ってしまう場合である。野球場を各チームが予約する手間がはぶけ、なおかつリーグ戦が行われるとなればチームにとっては活動の手間と試合数不足が解消されることになる。しかし、全軟連が野球場の確保を行うことは試合日程の強制を意味することでもあり、活動日に十分なメンバーが揃わないといったチームが多く、個々のチームだけで人数の問題を解決するのは限界がある以上は、他チームとやりとりしながら互いが自分達の都合に合わせて活動ができる私設リーグの存在意義が認められる。

第6章 おわりに

6.1 結論

本研究の目的は軟式野球における私設リーグの発生経緯や運営の工夫、参加チームが受けている恩恵を明らかにし、全軟連への登録チーム数や軟式野球競技人口が減少している現状を鑑み、プレーヤー自らが継続的にスポーツ活動を作り出すための方法を提案すること、であった。

結果と考察を踏まえ、個人が行う私設リーグ運営と参加することによるチームの恩恵をまとめ、今後の軟式野球の発展と継続に対して提言を行う。

- ・私設リーグは活動の意欲がありながらも、全軟連の試合がトーナメント制で行われることによって勝ちあがれないチームの試合数が十分に得られないことや、対戦相手を思うように見つけることができないことなどの状況から、そうした問題を解決したいというニーズを持ったチームが生まれることによって発生する。
- ・個人が行う私設リーグは、リーグが野球場の利用予約をして各チームに試合日程を割り振ることができないため、リーグの進行は各チームの自主性に委ねられる点が多い。だが、そうした部分を逆に利用し、一定の期間内で各チームが協力しながら各々の都合に合わせて自由に試合日程を組めるような仕組みが必要である。
- ・私設リーグではチーム同士が連絡を取り合いリーグの試合消化を進める必要性や、各チームの成績を公表して順位付けなどを行っていることから、ウェブサイトの活用が不可欠である。リーグとしてのウェブサイトを持つことによって参加チームが早く、安く、楽に交流し試合を実施できるような仕組みを作ることが可能になる。
- ・私設リーグではルールとして「参加にあたって～は必要ない」もしくは「～を認める」という前提を定めてしまうことが重要である。例えば、全軟連主催試合では必ずチーム全員が同じユニフォームを着用しなければならないが、私設リーグでは予め、「ユニフォームを統一しなくてよい」というルールを決めてしまうことによって、参加チームが用具や人数を揃える手間が省け楽に試合が実施できると同時に、チーム同士でユニフォームの事項について協議し合う必要がなくなり、円滑に試合を進行させることができる。
- ・成人の軟式野球チームの活動の9割以上は試合をすることであった。したがって活動の継続には近場で安く楽に対戦相手を見つけることが大切になる。私設リーグに加入することによって近場のチーム同士が知り合う場になり、リーグ制度によって一定の試合数を確保できる点で私設リーグはチームの活動継続の場として貢献している。

- ・私設リーグは各チームのウェブ上での成績管理や順位付けと、リーグ制度による総合的な成績によって優劣が決まるため、他チームと競い合いながら野球を楽しむ場として成立している。
- ・私設リーグは参加チーム同士の連絡や協力によって試合を開催し日程を消化していくため、自主性が育まれる場であると同時に、何度もリーグ内のチームと連絡をしあったり試合を行ったりすることによって、チーム同士の信頼関係が生まれ、野球という楽しみを共有できる場という、チームにとってやりがいのある大会として成立している。

以上をまとめた概念図を図 6-1 として提示する。

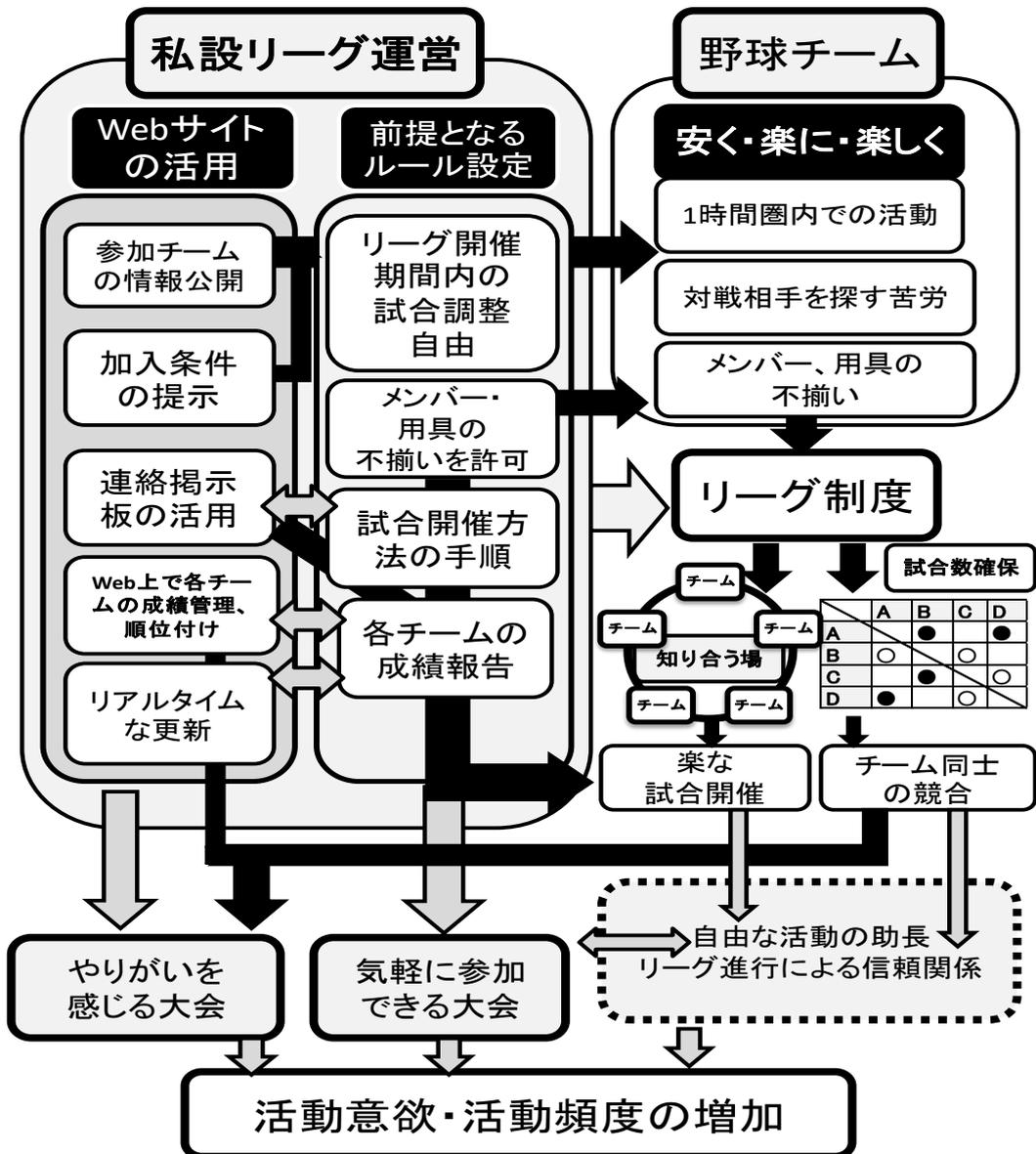


図 6-1 私設リーグ運営と参加チームに対しての恩恵

本研究ではこれまで全く研究のなされなかった私設リーグというものを対象に、プレーヤー同士が主体的に活動機会を作り出す方法や利点について触れた。今後の軟式野球においてこのような仕組みが普及すべく本研究が貢献できれば幸いである。

6.2 今後の課題

本研究では面接調査とアンケート調査を行った。

面接調査に関しては、調査事例が2つという結果になり、私設リーグをより一般化するにはさらなる面接調査や今回の語りを基にしたアンケート調査をより多くのリーグ代表者に対して行う必要がある。私設リーグに加入しているチームに対して行ったアンケート調査では統計的なサンプル数が十分でなかった点と、私設リーグに加入したことによる野球の実施率においては具体的にどのように上昇したのかについて明確な数字として表すことができなかったために今後の課題としたい。

謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教員の海老塚修教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。

そして、本論文を形にすることができたのは、突然の調査依頼にも関わらず快く引き受けてくださった私設リーグ代表者の御二方のご協力のおかげであります。

見ず知らずの学生に対して、ご親切に、ご丁寧に、私設リーグについて、軟式野球について長時間に渡って語って頂きました。共に野球を楽しむ仲間として、野球に対しての熱意を語り合ったことが非常に印象に残っております。所属するチームの皆様に対してのアンケートのご協力も快く引き受けてくださいました。アンケートにご協力頂いたチームの皆様にも感謝の念でいっぱいでございます。

この場を持ちまして、皆様に深く感謝の意を表します。

文 献

引用文献

- 1) 笹川スポーツ財団 スポーツ白書 ～スポーツが目指すべき未来～ 2011年 29-36
- 2) (株)矢野経済研究所 2012年版スポーツ産業白書 2012年 264-265 282
- 3) (財)全日本軟式野球連盟 <http://jsbb.or.jp/> 2012年12月17日
- 4) 文部科学省 スポーツ基本法(平成23年法律第78号)(条文)
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm 2012年12月17日
- 5) 笹川スポーツ財団 スポーツ・ライフデータ研究
<http://www.ssf.or.jp/research/sldata/index.html> 2012年12月17日
- 6) 国民新聞運動部 日本野球史(ミュージアム図書復刻版) ミュージアム図書2000年
- 7) (財)全日本軟式野球連盟 軟式野球史 ベースボールマガジン社 1976年
- 8) 田中 恵 地域集団スポーツにおける社会関係の形成、継続・発展の規定要因
-神奈川県旧・津久井郡城山町における軟式野球を事例として- 桜美林大学 教育の現場から 9,75-95 2009年
- 9) 中島豊雄 地域スポーツ集団の社会学的研究 -軟式野球チームの存続と崩壊-
名古屋大学教養部紀要.B,自然科学心理学(16),59-84 1972年
- 10) 文部科学省 スポーツ施設現状調査結果の概要
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/shisetsu/kekka/1261398.htm
2012年12月17日
- 11) 総務省 情報通信統計データベース <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/>
2012年12月17日

参考文献

- ・池井優 野球と日本人 丸善ライブラリー 1991年
- ・池井優 野球おもしろ文化論 共同通信社 1988年
- ・大野貴司,神谷拓,竹内治彦 体育・スポーツと経営 スポーツマネジメント教育の新展開
ふくろう出版 2011年
- ・日下裕弘,丸山富雄,加納弘二 生涯スポーツの理論と実際—豊かなスポーツライフを実現する
ために 大修館書店 2001年
- ・熊本浩志 「たかが草野球」で人生が変わる 講談社 2010年
- ・小林秀一 社会人軟式野球の組織構造と運営:社会人硬式野球および軟式野球の比較
愛知学院大学教養部紀要 45(1),135-150 1997
- ・佐山和夫 野球はなぜ人を夢中にさせるのか -奇妙なゲームのルーツを訪ねて-
河出書房新社 2000年
- ・田中亮太郎 軟式野球の将来的発展に関する課題についての検討 大阪芸術大学紀要
- ・長久保由治 各都道府県における軟式野球の現状とその発展策に関する研究
早稲田大学院 2010年度リサーチペーパー 2010年
- ・ハガー・マーティン,ハヅィザランティス・ニコス,湯川進太郎他
スポーツ社会心理学—エクササイズとスポーツへの社会心理学的アプローチ
北大路書房 2007年
- ・藤田紀昭 スポーツ集団の運営形態に関する研究 ~特に子どものスポーツチームの運営に注
目して~ スポーツ社会学研究 3 1995年
- ・松村和則 地域づくりとスポーツの社会学 道和書院 1993年
- ・山下雅彦 地域スポーツの社会学 ふくろう出版 2010年